



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道に於ける農作中心の移動に関する研究
Author(s)	荒又, 操
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 1, 1-50
Issue Date	1931-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10594
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_p1-50.pdf



北海道に於ける農作中心の移動に關する研究

荒 又 操

- 一、はしがき
- 二、農作中心の意義、性質、並びに之れが調査方法
- 三、北海道に於ける農作中心の位置及び其移動
 - イ、本道畑作中心の東北進、並びに其の近年の位置及び移動
 - ロ、本道米作中心の東北進、並びに其の近年の位置及び移動
 - ハ、本道農耕地中心の東北進、並びに農作(田畑合計)中心の近年の位置及び移動
- 四、北米合衆國に於ける農業中心の位置及び其の移動
 - ホ、農作正中點(本道に於ける調査、北米合衆國に於ける調査)
 - イ、北海道に於ける農作中心の移動の社會經濟的關係
 - ロ、本道農作中心の既往移動と人口中心との關係
 - ハ、本道農作中心の近年移動と人口中心との關係
- 五、北海道に於ける農作中心移動の將來(農耕適地中心、水田適地中心)

一、はしがき

北海道が一部先覺人士に依りて重要視せられ、其の開發の必要に着目せられたるは既に遠く數百年前にありとせられて居る。然れども明治初年に至るまでは産業として之を見得るものは一に漁業あるに過ぎない有様であつた。北海道の農業が産業としての發達の緒についたのは實に明治以後の事に屬し、今日に至るまで僅かに六十餘

年を経たるに過ぎず其の歴史は短い。而かも此の間に於ける發展の跡は極めて顯著なるものあり、次表に見るが如く、明治二年開拓使設置の年に於て八百町歩餘に過ぎなかつた懇成耕地が、今日其の面積八十万町歩を越え、當時の約一千倍に及ぶに至つた。

北海道懇成耕地面積累年比較表

年次	懇成耕地	田	畑
明治二年	八一五・二 _町	三三二・三 _町	四八二・ _町
明治五年	二、九一五・八	四二〇・一	二、四九五・七
明治十年	七、〇八六・八	五六二・三	六、五二四・五
明治十五年	一四、九二七・六	一、一九二・七	一三、七三四・九
明治二十年	三一、三五一・四	二、〇七四・六	二九、二七六・八
明治二十五年	五七、三二八・一	二、五九八・〇	五四、七三〇・一
明治三十年	一四二、六一四・八	五、九三一・二	一三六、六八三・六
明治三十五年	二八八、九二五・六	一八、七七二・五	二七〇、一五三・一
明治四十年	四二七、九七四・九	二四、六三七・〇	四〇三、三三七・九
大正元年	六一七、六一〇・一	四九、三五二・四	五六八、二五七・七
大正五年	七一、二二三・七	六三、三一三・七	六四七、九一〇・〇
大正六年	七四六、五三七・六	六七、〇四五・〇	六七九、一三二・六
大正七年	七九五、一九一・五	七〇、八七四・七	七二四、三一六・八
大正八年	八一六、一一九・一	七三、八七九・二	七四二、二三九・九
大正九年	八三九、〇七〇・四	八三、八四六・一	七五五、二二四・三
大正十年	八五四、五七七・三	九三、三五四・九	七六一、二二二・四
大正十一年	八四八、〇二二・九	一〇五、二八二・六	七四二、七四〇・三

大正十二年	八二六、四四六・六	一一八、一二九・八	七〇八、三一六・八
大正十三年	七九八、八一・二	一二七、三五・三	六七一、四五九・九
大正十四年	七八六、三三六・八	一三六、〇一一・二	六五〇、三二五・六
昭和元年	七八四、二六九・一	一四六、六二七・七	六三七、六四一・四
昭和二年	七八九、四二九・五	一五八、九一四・一	六三〇、五一五・四
昭和三年	八〇七、五〇一・七	一七四、四七四・八	六三三、〇二六・九

比較的短年月間に於て尙斯くの如き急速なる發展狀態は獨り北海道の如き新開國土に於てのみ能く之を見得るものであつて、舊開府縣の如きにありては到底此の比あるを認める事不可能である。

而かも前掲表につき更に之を詳細に點檢するならば、さしも著しき増大率を以て發展し來れる本道農耕地面積の擴張も、大正十年以來は却つて稍々減少せるの事實さへ現はれ、近年其の發展は停頓の狀態を示して居る。即ち田面積は當局の獎勵補助と民間の造田熱とにより依然として擴張の趨勢にあり、又畑地に於ても一方開墾・荒地復舊・地目變換等による擴張あれども、他方之とは逆に畑地は年々或は田地に變換せられ、或は宅地・道路・鐵道・河川・水路等の敷地として一部其の面積を奪はるゝ外、荒地として潰廢に歸するものも亦甚だ大にして、之を全体として見る時は、獨り前述の擴張部分と相殺するのみか、更らに絶對面積に於て縮少せる年次さへ之を見た。之れ言ふまでもなく戦後好景氣の後を受けての漫性的農業不況に其の重大なる原因を見るべきではあらうが、更らに北海道農耕地擴張の勢の近年漸く弱化する事實を否む事が出来ない。即ち之を換言すれば、北海道農業の發達は既に一段階を終へ、此處に更らに新らたなる發展方途に向ふべき一轉期に際會して居るものと言ふ事が出来ようと思ふ。

此の時に當り、渡島國の一角に初まつた本道の農業が今日の發展段階に達するまで、其の間地域的に如何なる方向を取りて進み來つたか、而して其の今日の現狀は地域的に綜合觀察すれば如何なる位置に達し居るか等につ

き統計的調査研究を爲すは、本道農業發達の特殊性に鑑みて、内地府縣に於ける其とは別種の必要と興味を感じるものである。

此の故に私は、本道農業作付面積を一般畑作と米作とに二分して、其の各々につき、嘗て高岡博士が調査研究せられたる「北海道に於ける人口中心及正中點に關する研究」⁽¹⁾に倣ひ、北米合衆國の農業中心調査に規つて、之れが中心並に正中點を調査せる結果を此處に論述する次第である。蓋し一國に於ける農業發達の程度を知るの要素としては、農業生産物の數量、其の價額、土地價額、投下資本の額、農場收益額、農業人口、耕地面積等種々の方面から之を觀察するの必要なるは勿論であるが、此處に農業作付面積の變遷は北海道農業の今日までの發達經過を知るが爲めには最も代表的の目安たるべきを信するが故である。

二、農作中心の意義、性質並に此れが調査方法

農作の「中心」とは、高岡博士に於ける人口の「中心」と其の意義を同じうするものであり、唯彼は人口に關する中心であり、此は農作に關する中心であると言ふ點に相違するに過ぎない。即ち博士に於ける研究對象たる人口を私は農業作付地に採りたるまでである。従つて此處に所謂農作中心とは調査せんとする或區域の土地を以て重量なき一の平面と假定し、唯農業作付地のみを、(畑作中心調査の場合は畑作付地のみを、米作中心調査の場合は米作付地のみを)以て重量を有するものと見做し、單位作付面積に對する重量は常に一定なりとする。而して其の調査期に於て、該調査地域内に於ける各作付地が其の平面上に壓力を及ぼす時、其の平面を支持して東西南北が均衡を保つ様な該平面上の一點を言ふのである。之を換言すれば農作中心とは調査區域内に於ける農業作付地の重心に外ならない。

従つて農作中心とは如何なる性質を有するかは自ら分明である。即ち農作中心の位置は調査區域内各地方の作

(1) 高岡熊雄博士著 増補農政問題研究 498-547頁
同 第二農政問題研究 187-200頁

(2) Census Reports Vol. V Twelfth Census of The United States, 1900. Agriculture Part I P. XXXVI-X L,
"Changes in the Center of Agriculture in the United States."

付地面積の廣狹、粗密狀態が東西南北何れも其の中心を離るゝ距離の大小に應じて、或は互に相殺し、或は互に加重し合ひて、影響せらるゝものである。更に之を詳言すれば、各地方に於ける各農業作付地は、何れも其の面積の廣狹と其の中心を去る距離の大小との相乗積に比例する力を以て、中心を各自らの地點に引き寄せんとする。而して此の何れも方向を異にする大小數多の諸力が互に東西南北其の向ふ處の方向に依つて、相反する諸分力は相殺し、相一致する諸分力は加重し合ひて作用し、結局農作中心は此等數多の諸分力の合力に依つて其の位置は決定せられるものである。畢竟農作中心は調査區域内に於ける農業作付地の地域的分布狀態に應じ、綜合的に見て、其の密なる地域に近く、其の粗なる地域に遠く位置する理である。かるが故に吾人は農作中心の所在を調査する事に依つて、能く調査區域内に於ける農業作付地の地域的相對的分布狀態を最も簡明に大觀する事を得る許りではなく、更に時期を異にせる調査を互に比較し其の中心の移動を吟味する時は該調査區域内に於ける農業作付地の地域的分布の相對的推移の方向及び其の程度を最も正確に認識する事を得せしめるのである。

次に農作中心の調査は如何なる方法に依るかと言ふに、前述農作中心の意義により自ら分明である。即ち調査區域内に於ける農業作付地は何れも單位面積に對して相等しき重量を有するものとして其の重心を算出すれば足る。然れども、農業作付地の地域的分布は極めて廣汎なるが故に、各一反步或は一町步を基礎として其の中心を算出するが如きは其の煩に堪へず、又我國の統計材料は到底斯くの如き方法を許さない。此の故に私は北海道に於ける實狀と統計材料の使用上に於て最も便宜にして、然かも可能の範圍に於て最も正確を期し得る方法たる高岡博士の人口中心に關する調査方法を其の儘此處に適用した。即ち最小行政區域たる全道二百七十箇の市町村を基礎とし其の區域内農業作付地の中心は其の行政役場の所在地にありと之を假定したのである。斯くの如く各小地域の各中心を假定する時は、調査區域に於ける總農業作付地の中心算定の方法は力學に於ける重心決定の方法に依りて之を機械的に算出し得る。

三、北海道に於ける農作中心の位置及び其の移動

北海道に於ける農作中心を算出調査するが爲めに其の調査材料としての市村別農業作付面積は、北海道廳統計書に於ける「墾成耕地」或は「耕地面積」の集計の基礎たる各市町村長より北海道廳長官宛報告せる書類の綴本に依つて之を得る事が出来る。然れども古き年次の數字は或は紛失し、或は火災の爲めに滅失して十分に之を手にする事を得ないのは甚だ遺憾である。此の故に私は大正九年（畑作に於ては大正九年の數字なき故大正十年）大正十四年、並びに昭和三年の三年次に就て米作、畑作各々其の作付面積によつて前述の如き農作中心を調査して以て最近數ヶ年に於ける北海道農業の地域的推移を観察し、其の近狀を調査した。而して既往の農作中心變遷の狀況に關しては止むなく之を明治二十年以來五ヶ年毎に於ける本道各國別の米作面積並に墾成畑地面積に於ける其の比率的増減を調査し以て農作中心移動の狀を大觀する事にした。勿論此の如き方法によりては農作中心に關して的確なる一點を得る事は出来ないが地域的に其れが大體の所在を知る事が出来、又其の年次の移動の方向に就ては其の大勢を伺ふ事は可能である。特に本道に於ける既往の農業作付地の地域的發展推移の顯著なるに於てをやである。尙明治二十年を以て調査の最初之年としたる理は、北海道廳の設置せられたのは明治十九年であり、本道農事統計に就き稍々正確なる數字を得たるは此の年以來であるから私は更に其の翌年たる明治二十年より始め、每五ヶ年の狀態を観察するを以て最も調査上便宜と心得たからである。而して尙既往に於ける農業の移動狀況を大觀するに、米に於ては其の作付面積によりたるも畑作に於ける既往の調査に關してのみ墾成畑地面積を以てしたるは、本道の統計材料は古き年次のものに於ては、總畑作付面積に關する調査を欠くが故に比較の爲めにはむしろ總て之を墾成畑地面積に取るを以て可とするであらうし、往年に於ける著しき耕地擴張の際に於て

は地域的分布比率の變化極めて顯著なるものがあるが故に、畑地面積比率と畑作付面積比率間に多少の開きありとしても全体の趨勢より見る時は殆んど之を度外視して大過なきが故である。

次に然らば本道に於ける既往農作の地域的相對的分布状態は如何なる變遷を經、農作中心は如何なる地域より如何なる方向に發展し來りたるか。先づ畑作に就て之を見よう。

イ、本道畑作中心の東北進並びに其の最近の位置及び移動

明治二十年より五ヶ年毎の本道各國別畑地面積並びに之れが百分率は次の如くである。

北海道墾成畑地面積國別累年比較表

國別	明治二十年	明治廿五年	明治三十年	明治卅五年	明治四十年	大正元年	大正五年
石狩	五、七四四・七 ^町	一七、二六〇・〇 ^町	三二、〇〇九・六 ^町	一三、〇四二・九 ^町	一五、三八四・三 ^町	一五、八四六 ^町	一九四、七三三・三 ^町
後志	四、三五四・四	五、九九四・三	一六、七六六・三	三六、四四五・四	四五、一八一・五	五七、〇九三・八	五七、七三六・六
渡島	二、二九〇・〇	一五、五五六・二	一九、〇七三・三	三六、四九一・九	三三、七三六・一	三三、七三三・〇	三三、五五三・三
膽振	三、八九五・五	八、三四四・四	二〇、一九八・四	三五、三五九・九	五八、三三三・一	八八、〇三六・三	一〇三、四三五・三
日高	一、六三六・〇	三、〇四九・九	六、八八〇・〇	一一、六八九・四	一六、三〇〇・六	三三、七八一	三四、九三二・九
十勝	一九一・四	二八八・五	五、五九一・二	一五、一八八・四	三九、〇九六・〇	六二、七〇八・九	八八、七四四・一
釧路	三三九・五	一一、二六一・一	二、二九六・九	四、一〇七・八	五、六〇八・七	三、三三六・七	一一、六七二・二
根室	七五九・三	一、一五三・五	九、五七四	一、三三一・一	一、五四〇・九	二、六二九・〇	二、二七九・七
千島	一一・四	三、四一〇・〇	九一・三	一、四四二・三	一、五三八	二、六三三・三	三、三三六
北見	三三・六	一七二・七	一、二四六・六	一〇、八六六・四	一六、八四四・七	四三、六九九・五	五八、五四四・五
天鹽	九〇・一	九三三・八	一、四三三・八	一、五四七・七	三三、三〇七・三	六、八八五・二	七三、五七三・六
計	二九、三七六・八	五三、一四三・四	一、二七、〇六六・八	二七、一五三・一	四〇、三三三・九	五、六八、二五七・七	六、四七、九〇〇・〇

比 例 數

國 別	明治二十年	明治廿五年	明治三十年	明治卅五年	明治四十年	大正元年	大正五年
石 狩	一九・六三%	三三・六七%	四三・三五%	四四・九七%	三七・六九%	三三・七〇%	三〇・〇六%
後 志	一四・九四	二一・二六	二二・九四	一〇・四六	一一・二〇	一〇・〇五	八・三〇
渡 島	四・七四	二九・二七	一四・三三	九・八一	八・五三	五・九四	五・〇〇
膽 振	一三・二元	一五・七〇	一四・七四	一三・〇五	一四・四六	一五・四九	一五・九六
日 高	五・五五	五・七四	四・九八	四・三三	四・〇三	三・九〇	三・八五
十 勝	〇・六五	〇・五四	四・〇八	五・六一	九・六九	一〇・八六	一三・七〇
釧 路	一・二六	二二・一〇	一六・六八	一・五三	一・六九	二・一五	二・一一
根 室	二・五九	二二・二七	〇・七〇	〇・四六	〇・六八	〇・四六	〇・三三
千 島	〇・〇四	〇・〇三	〇・〇七	〇・〇五	〇・〇四	〇・〇五	〇・〇三
北 見	〇・〇二	〇・三三	一・〇一	四・一〇	四・一八	七・五三	九・〇三
天 鹽	〇・三三	〇・一八	一・三五	五・七三	八・三三	一〇・八九	一一・一〇
計	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇

右表の如く墾成畑地面積は明治二十年に於て二万九千餘町歩であり、之を近年畑地面積の最も廣大なりし大正十年の約七十万七千餘町歩に比すれば僅かに其の四〇餘を占むるに過ぎない。而して當時此の二万九千餘町歩中一万二千二百町歩餘即ち全体の約四二％は本道西南の一角たる渡島國に屬したるものであり、殘餘五二％が他の十國に分屬して居つたのである。而かも其の中で比較的分布面積の大なりしものは石狩國の一九・六％、後志國の一四・九％、膽振國の一三・三％、日高國の五・六％等であり、何れも本道の西部、南部或は中央部を占むる地域である。十勝、釧路、根室、千島、北見等東部及北部五ヶ國は何れも極めて僅少の耕地を有せるに過ぎず之を合計するも全耕地の五％に満たない状態であつた。之れに依つて見るに當時の本道の畑作中心は未だ著しく其

の西南部に偏したる地點にありし事は明らかである。

之を五ヶ年後たる明治二十五年に見るに總畑地面積五万三千餘町歩、即ち五ヶ年間に約一・八倍に増加した。而して其の絶對面積に就ては何れの地域に於ても増加せられて居るが、其の増加比率に至つては地域的に甚だしき徑庭を見る。増加比率の最も大なりしは石狩國であり、全道畑地面積の三三・六七%を占むるに至り、全道平均増加率を越ゆる事、實に二三・〇五%である。其他之れに次で平均増加率を超過せるものを順次擧ぐれば、膽振國(全道畑地面積に對する百分率 $\frac{55.0}{100}$ %)、釧路國(同百分率 $\frac{22.0}{100}$ %)及び北見國(同百分率 $\frac{0.33}{100}$ %)等である。而して面積増加の割合が全道平均増加率に及ばざりしは渡島國(同百分率 $\frac{33.7}{100}$ %)を最とし、後志國(同百分率 $\frac{22.6}{100}$ %)に次ぐ。而して其他の諸國の増加率は稍々平均増加率に近い。畑作中心は地域別畑地面積の比率増加に應じて變化する事、既に中心の性質の項に於て説明せるが如くである。即ち此の兩調査年次を比較するに、渡島、後志の兩國に於て畑作は相對的に、減少し、それだけ石狩、膽振、兩國に主として増加したるが故に畑作中心は東北方に牽引せられ移動したるべきを知る。

更に明治三十年に於ける畑地面積は、明治二十五年の更に約二・六倍となり、其の地域別分布の相對的變化は渡島國が前期より一四・九六%を減じて全道の一四・三一%を占むるに過ぎず、之に反して石狩國は前期より一・二・五八%を加へて全道の四五・二%に昇つて居る。其他には甚しき相對的變化を示せる國を見ざる中に獨り増加率の大なるは、十勝國が前期に於て僅かに〇・五四%なる極めて僅少割合を示めすに過ぎざりしものが此の期に於て一躍三・五四%を加へて全道畑總面積の四・〇八%を占むるに至つて居るのが最も注目に値するものである。即ち此の期に及ぶや、渡島、後志、膽振等本道西南部を占むる三國を合計するも、四一%に達せず、明治二十年に於ける渡島一國の割合にさへ及ばない。之に反し石狩は今や一國を以て遙かに此の三國の合計を凌駕して居るのである。而して東部及び北部地方に於ては前述十勝の著しき進展の外、北見、天鹽の兩地方に多少の進捗を見、

釧路、根室兩國は却つて多少其の分布比率の減少したるありと雖も、結局此等東北部五ヶ國の合計は前期の三・四一%より、今期八・七九%に進んで居る點を見れば、本道畑作中心の東進して石狩國に深く進入せるを知り得るのである。

明治三十五年に及ぶや、總畑地面積は二十七萬餘町歩に及び前期の更に二倍に擴張せられた。而して其の地域別の相對的増減は、本道西部及南部の諸地方に於て何れも微少乍ら若干の減少を見て居るが中に、獨り渡島國のみは今期に於ても依然として激減し、全道平均増加率に達せざる事約四・五%である。而して此等西南諸地域の比率減少を補ふに東部及び北部地域たる天鹽、北見、十勝三國の面積増加率を以てして居り、畑作中心の移動に關し從來最も決定的勢力を示せる中央部地域石狩國は今期に於て漸く其の力を失墜して居るのは言ふまでもなく東北諸地域の勢力の勃興に壓せられたるものである。此れに依つて吾人は今期に於ても畑作中心の更に東北方に進行したるを認める事が出来る。

而して次期明治四十年に至つては如何と言ふに、既に前期に於て約十二萬一千五百町歩の既成畑地を有するに至りたる石狩國は今期更に新たに三萬一千町歩を加へたりと雖も、此の廣大なる畑地面積の絕對増加を以てするも、遂に相對的には却つて著しき減少を示せるに最も注目すべきである。之れ東部並に北部諸地域に於ける更に一層目覺ざましき相對的増加に依つて阻まれたるものに外ならず、今や畑作中心を東北方に移動せしむる決定的勢力は中央部地域を去つて十勝、天鹽等東部並に北部地域に移りたる事を示すものである。即ち今期最も大なる畑地面積の相對的増加を示せるは十勝國であつて、獨り斷然頭角を抜き平均増加率を超過する事四・〇七%、之に次ぐは天鹽の同超加一・二五〇%である。此の狀勢は今期に於ても畑作中心をして更に東北進せしめたるを明示する。

次に大正元年を経て大正五年に至るや全道畑地面積は累進を重ね實に六十五萬町歩に垂んとして居る。而して

其の地方別の相對的分布變化は兩期を通じて一樣に、石狩、渡島、後志、日高の諸國に於て減少し、殘餘諸國即ち何れも本道東部及び北部の奥地域を占むる十勝、天鹽、北見の諸國に於て顯著なる増大を示した。即ち此の兩期、畑作中心は更に東北に向つて進み、今や本道内地深く位置するに至りたるべきは極めて明らかである。

叙上の如く統計數字を詳細に點檢する事に依り、本道の畑作中心が明治二十年より大正五年に至る約三十年間常に東及び北の方向を取りて移行せるを認め得るのであるが、今更に前掲資料により、之を圖示し、各國別畑地分布の相對的動きにつき要約すれば、

渡島國——當初急激に其の相對的分布率を減じ、明治中葉以後は漸減的歩調をたどれり。

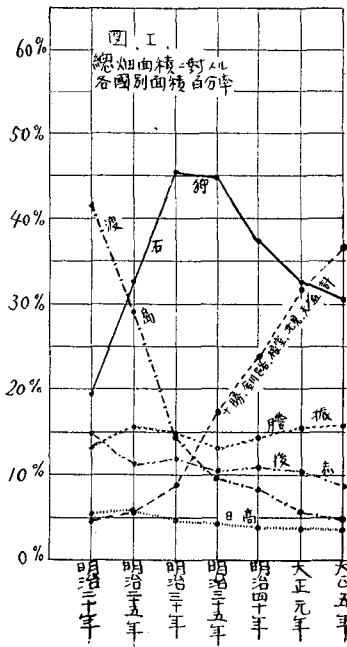
後志國、日高國——大体微量乍ら漸減的傾向を示せり。

膽振國——増減不同にして其の間著しき變化を見ず。

石狩國——當初急激に増加し、明治中葉以後漸減的傾向を示せり。

十勝、釧路、根室、北見、天鹽五ヶ國合計——累年極めて顯著なる増加を示せり。

即ち既往本道畑作中心は、當初（明治二十年—同三十年）主として渡島國畑地面積の相對的激減と、之に伴つて起れる石狩國の相對的激増に依つて次第に道南地域より道内地へ移行せるものであり、明治中葉以後（明治三十年—大正五年）は渡島國の相對的漸減歩調と共に、石狩國が却つて漸減的傾向に轉回して、之を助け何れも消



極的影響を及ぼしたると、之に伴つて起れる十勝、北見、天鹽等東北部地域の極めて顯著なる相對的增加に依りて積極的に影響せらるゝあり、爲めに中心は更に道内地深く牽引せられたるものである。

然らば近年に於て畑作中心は如何なる地點に到達し如何なる動きをなしたるか。之に答ふるものは即ち私が既に二に述べたる統計材料と方法に依り調査した畑作中心であらねばならない。

本道本島の、大正十年、大正十四年、昭和三年、各年次畑作中心に關する私の調査結果は次の如くである。

近年に於ける本道本島の畑作中心 (略圖(六頁)参照)

	北緯		東經		位 置	前 期 移 動
	度	分	度	分		
大 正 十 年	四三、一七	五四	一四二、二二	二〇	下富良野驛の西南 西約四里餘	東イイ北方 約一里十町餘
大 正 十 四 年	四三、一八	一六	一四二、一六	一五	下富良野驛の西南 西約二里三十町餘	東イイ南方 約二里三十町
昭 和 三 年	四三、一七	四〇	一四二、二四	三〇	下富良野驛の南微 東約一里半	
移 動 總 計	(-) 〇、〇	一四	〇、一	一〇		
一ヶ年平均移動	(-) 〇、〇	〇、二	〇、〇	一、四		

即ち最近昭和三年度に於ける本道畑作中心は北緯四十三度十七分四十秒、東過百四十二度二十四分三十秒の地點、即ち石狩國の東隅、下富良野の南微東約一里半の個所にあつて、本道本島の地理的中心(北緯四十三度十八分十六秒、東經百四十二度三十一分三十四秒)を去る西微々南方僅かに約二里半を距つるに過ぎない。而して昭和三年の畑作中心を大正十年、大正十四年の兩期に於ける調査結果と比較すれば、畑作中心は近年に於て大北緯四十三度十八分線に沿ひて東方に向ひ一ヶ年約二十町移動して居る。

之を要するに、渡島國の一角に初まりたる本道の畑作は新耕地の開發により漸次内地に進入したのであるが、本道畑作中心は私が吟味せる最初の年次たる明治二十年に於ては未だ本道西南部に偏して居つた。然るに其後年

を逐ふて東進と北進とを重ね、近年は本道地理的中心を去る程遠からぬ地點にまで進行し來つて居る。而して其の最近の移動の方向及び速度より之を推すならば今後數年ならずして畑作は稍々地理的中心に合致せんとする趨勢にありと言ふ事が出来るのである。然らば本邦農業に於て特殊の重要性を有する米作に關して北海道は如何なる地域的分布の變遷を経來りたるか、之れ私が次に述べんとする處である。

□、本道に於ける米作中心の東北進並に其の最近の位置及移動

北海道に於ける既往米作付面積の地域的分布の變遷状態は一般畑作に就ての其よりも更に一層顯著なるものであるを認める。

次表は北海道廳統計書に依り作成せる本道各國別作付面積並に之れが百分率の年次的變遷状態である。

北海道米作付面積國別累年比較表

實 數

國 別	明治二十年	明治廿五年	明治三十年	明治卅五年	明治四十年	大正元年	大正五年
石 狩	444.4 ^町	468.3 ^町	2,356.0 ^町	9,133.2 ^町	14,013.4 ^町	34,473.8 ^町	45,611.8 ^町
後 志	1.4	6.8	7.4	63.4	10.1	167.9	2,037.2
渡 島	1,766.8	1,956.0	2,366.9	4,732.0	4,742.7	4,933.5	5,153.3
膽 振	1.5	0.5	9.2	1,833.8	2,162.5	3,333.3	4,167.1
日 高	8.1	3.4	7.6	89.0	101.4	375.5	733.2
十 勝	—	—	—	2.9	35.6	224.7	270.7
釧 路	—	—	—	—	—	4.0	7.1
根 室	—	—	—	—	—	—	—
千 島	—	—	—	—	—	—	—
北 見	—	—	4.0	36.9	4.2	2.2	4.9

天鹽	1,732.3	2,470.4	5,702.3	16,505.9	33,261.1	44,570.6	59,035.3
計	1,732.3	2,470.4	5,702.3	16,505.9	33,261.1	44,570.6	59,035.3

比例表

	明治二十年	明治廿五年	明治三十年	明治卅五年	明治四十年	大正元年	大正五年
國別	明治二十年	明治廿五年	明治三十年	明治卅五年	明治四十年	大正元年	大正五年
石狩	2.4%	19.3%	40.7%	55.7%	62.9%	72.4%	77.6%
後志	0.0%	0.2%	1.4%	3.4%	4.5%	3.5%	3.5%
渡島	96.9%	80.3%	40.4%	28.6%	23.0%	10.8%	8.7%
膽振	0.0%	0.1%	1.6%	11.1%	9.7%	7.7%	7.0%
日高	0.0%	0.1%	0.6%	0.5%	0.9%	0.3%	1.3%
十勝	0.0%	0.1%	0.1%	0.0%	0.2%	0.5%	0.4%
釧路	0.0%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%
根室	0.0%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%
千島	0.0%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%
北見	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.3%	0.0%	0.0%
天鹽	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

即ち右の表により之を見るに、明治二十年末に於ては本道米作付面積は僅かに一千八百町歩に満たず、之を昭和三年の十六万六千八百町歩に比較すれば其の一多強を占むるに過ぎない状態であつた。而して其の分布を見るに本道十一ヶ國中米の多少とも作付せられたるは渡島、石狩、日高、後志、膽振の五ヶ國に過ぎず而かも其の大部分一千七百餘町歩即ち九七多は渡島國內にありたるもので、第二位の石狩國と雖も五十町歩に満たず、他の三國に至つては或は十町歩に満たず或は二町歩に満たざるものである。即ち當時米作付地は殆んど渡島國內に限

られたと言ふも過言ではない。従つて米作中心は渡島國內にあり、石狩、日高の兩國の微弱なる中心牽引力にして尙或は米作中心をして渡島國外に出でしむるありとしても、渡島國內浦海岸の地點を遠く去らざりしは見易き事實である。

其の後五ヶ年を経て明治二十五年に至るや本道米作付總面積は二千四百町步餘、即ち前期の約三割半の増加を見た。而して其の大半は石狩國に於ける増加であり、殘餘が渡島國の其である。他の諸國に於ける五町步内外の増減に至つては此處に問題にするに及ばぬ。かくて此の期、石狩國の分布百分率は前期よりも總米作付地の一六・七%を増して一九・二%に昇り、丁度それだけ渡島國に於て相對的に減少してゐるのである。之れに依つて見るに渡島國內、或は同國を出づるも遠からざる地點にありたる米作中心は石狩國の相對的増加のために牽引せられ、稍々東北方に移動したるべきは明らかである。然れども此の期に於ける渡島國の分布比率が尙全体の八〇%以上を占むるを見れば米作中心は石狩國よりは未だ遙かに渡島國に近き地點にありたるべき筈である。

次に明治三十年に於ける地域的分布状態に見るに石狩國は五ヶ年前の比率に更に二一%半を加へて全体の約四一%を占め、之れに反して渡島國は前期の比率の約半分に減じ四〇%半を占むるに過ぎず、石狩國は渡島國よりも僅か乍ら上に出て居る。而して此の間、膽振國が稍々其の分布比率を増進して約一七%に上り米作中心の動きに相當影響を與ふるに至つて居る。即ち此期に於て米作中心は渡島國を遠く去り石狩國及び膽振國の兩の牽引力により其の合力の方向たる大約東方に向つて著しく進出したるべきを知る事が出来る。

更に明治三十五年に至るや本道米作付面積平均増加率に達せざる事、渡島國の一・八三%、膽振國の五・六四%、後志國が二・五〇%及び天鹽、十勝の兩國がそれぐ、微量乍らも多少の超過を示して居る。而して結局此の期に於ける石狩國の分布比率は總米作面積の五五%を超え、之に對立する渡島國は約二八%に下落して居る。

即ち此の期に於ける米作中心の位置は前期の位置より更に東北方に移動せるを知り得る。

斯くて此の趨勢は明治四十年及び大正元年に至つて益々進められて居る。此の兩期に石狩國の米作面積は五五・二七%、プラス七・六七%、プラス一二・四九%と其の比率は漸次増大する一方であり、渡島國は二八・六%、マキナス七・三〇%、マキナス一〇・四八%と其の比率は益々減少の步調をたどり、其の間本道南部に位置する膽振國の米作面積比率も多少減少の傾向を示し、其他の諸國に至りては相互に一進一退はあれども其の比率の變化量極めて微にして、米作中心に影響する處大なるものあるを認めない。即ち之を觀れば米作付面積の分布比率は益々渡島國を去つて石狩國に移り來つて居り、従つて米作中心はいよいよ石狩國の牽引力に引き寄せらるゝ處が大となつて居る。

而して此の關係は更に大正五年に至るの期間に於ても依然として持續せられ、石狩國の分布比率は最早や總米作付地面積の七七・二六%にして全道の大半を占め、嘗つて全道米作付地面積の大部分を獨占せる渡島國は僅かに八・七三%を保留するに過ぎず、今や石狩國に比較すべくもなく、むしろ膽振國と比肩する程度となつて居る。而して以上三國以外の八ヶ國に至つては此の期に及ぶも其の米作付地面積は未だ極めて小にして、其の合計が全道總米作面積の僅かに七%に満たない有様である。即ち本道米作付地は大正五年に及んで其の大半は石狩國にあり、渡島・膽振の兩國が何れも石狩國の約一割の比率にある。是れに依つて之を觀れば本道米作中心は此の期に及んで既に石狩國の内部に深く進入し居りたるを推知し得るのである。

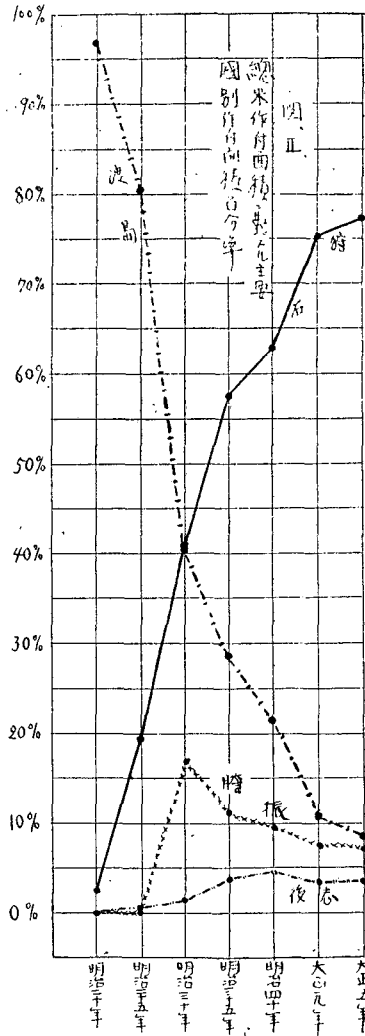
斯くの如く既往本道米作中心は道南渡島國を發して累年極めて著しき東北進を重ね移せるを認め得るのであるが、今之を圖示し、各國別米作付地分布の相對的變化狀況につき要約すれば、

渡島國——累年極めて急激なる相對的減少を繼續せり。

後志國——當初微かに漸増し、明治四十年頃以後は漸減的步調をたどれり。

北海道に於ける農作中心の移動に關する研究

膽振國——當初一時稍々顯著なる増大を示せるも明治中葉以來は漸減せり。
 石狩國——累年極めて急激なる増大を繼續せり。
 其他の諸國——米作付地分布面積割合極めて小にして此處に問題とするに足らず。



即ち既往に於ける本道米作中心の動きは、常に渡島國の米作面積の相對的激減による消極的要素と、之に伴ふ石狩國の相對的激増に依る積極的要素とに一貫、主として影響せられたものである。此の間膽振國は明治二十五年より同三十年の間に於て積極的要素として石狩國の牽引力を助け、明治三十年以後は石狩國の進展により中心の東北移動に對しては却つて消極的要素として影響した。叙上の如く大正五年に及び既に深く石狩國內部に位置せりと認め得らるゝ本道米作中心の最近に於ける位置並に其の移動の方向及び距離は如何であらうか。大正九年大正十四年、並に昭和三年に於ける各其の米作中心の調査結果は次の如くである。

近年に於ける本道本島の米作中心 (略圖(六頁)參照)

北緯 東經 位置 前期より移動

大正十年	四三、二〇、一三	一四一、五四、二〇	美唄驛の東北東約二十町余
大正十四年	四三、二三、四〇	一四二、〇三、一八	美唄炭山驛の東北三里弱
昭和三年	四三、二五、二八	一四二、〇八、二七	下芦別驛の南南西約二里二十六町
移動總計	〇、〇五、一五	〇、一四、〇七	東北東二里弱
一ヶ年平均移動	〇、〇〇、三九	〇、〇一、四六	

即ち最近（昭和三年）に於ける本道本島の米作中心は北緯四十三度二十五分二十八秒、東經百四十二度八分二十七秒の地點にあり、而して之を前掲大正九年及び大正十四年に於ける兩回の調査に依る米作中心の位置と對照して最近八ヶ年間に於ける移動狀況を見るに、本道本島米作中心は北緯四十三度二十分線と東經百四十一度五十三分線との交點より前者に對して北に約二十五度の角度をなす一直線に沿ひて一ヶ年に大約平均二十五町宛進行しつゝある現狀である。

之を要するに北海道に於ける米作中心は渡島國に初まり年を逐ふて東北方に移動し、既に石狩國の中央部に位置するに至つたものであつて、昭和三年に於ける所在點は下芦別驛の南南西約二里二十六町の個所、下芦別御料地、月見山の北麓にあり、本道の地理的中心を去る西北西方約九里の個所に當る。即ち米作中心は緯度に於ては大正九年に、既に地理的中心線を越へ、爾來更に北進を續けつゝあり、經度に於ては未だ地理的中心線に到達してゐないが、早晚之に到達せんとするの趨勢にありと言ふ事が出来る。

本道に於ける畑作と米作との相互に就き其の地域的分布、各中心の移動を比較するならば、第一に畑作も米作も共に本道西南部より發達し初め徐々に東方並に北方の地域に向つて其の開發分布を促し來つたのであるが、畑作は米作に先んじて新地に進み、従つて其の分布の地域的比率は畑作に於ては米作に於けるよりも比較的早くよ

り分散的なる傾向があり、米作は渡島・石狩並に膽振の三國に集中的である。而して畑作に於ても米作に於ても、渡島國の累年作付面積比率減少と之れに伴ふ石狩國の比率増大が畑作中心並びに米作中心を移動せしむる最も重大なる要素たりしものであるが、特に米作に於て其の顯著なるを見る。尙又既往に於ける中心移動の方向に就き見るに兩中心は何れも東北進をなせりと雖も米作中心の方向は畑作中心に於ける其よりも北進の程度に於て強く東進の程度に於て弱い。而して其の近年に於ける趨勢は兩中心ともに北進する事極めて少なく、畑作中心は殆んど正東方に進み、米作中心は僅かに北寄りの東方に進みつゝある。

ハ、本道農耕地中心の東北進

次に更に田畑を合計せる本道耕地面積の既往の地域的變遷を一瞥しよう。

北海道耕地面積（田畑合計）國別累年比較表

國別	實 數				
	明治二十年	明治廿五年	明治三十年	明治卅五年	明治四十年
石狩	五、八〇三 <small>町</small>	一八、五五四 <small>町</small>	六四、一八一 <small>町</small>	一三、八九三 <small>町</small>	一六八、〇四四 <small>町</small>
後志	四、三七四	六、一五	一六、四四八	二九、〇五五	六四、三九三
渡島	四、三三〇	一八、〇八一	三、八六三	三、二六五	三九、七〇〇
膽振	三、九〇七	八、三三五	三、五九九	三、七二四	三九、四九三
日高	一、六五五	三、〇五八	六、八五八	一一、七九八	一六、四四六
十勝	一、九七一	二、六九	五、五九四	一五、一九五	三九、一三三
釧路	三、四〇〇	一、一六五	三、二九七	四、一〇一	五、〇〇九
根室	七五九	一、一五四	九五七	一、三三三	一、五五五
					三、六二九
					二、二八〇

千島	北見	天鹽	合計	比例							
				明治二十年	明治廿五年	明治三十年	明治卅五年	明治四十年	大正元年	大正五年	
二	三三	九〇	三、三五	四八	二四	一、二四九	一、〇八九三	一六八四六	四三、七〇四	五八、五四〇	三三
四八	二四	三〇六	七〇	九一	一、八五三	一、五五〇	二八八、九三五	三三、三三一	四三、七〇四	六二、七八	七三、六九六
九一	一、二四九	一、八五三	三、三五	一、〇八九三	一、五五〇	二八八、九三五	四三、七〇四	六二、七八	七三、六九六	七二、三四	三三

石狩	後志	渡島	膽振	日高	十勝	釧路	根室	千島	北見	天鹽	合計	比例						
												明治二十年	明治廿五年	明治三十年	明治卅五年	明治四十年	大正元年	大正五年
一八・五%	一四・〇%	四五・三%	一三・五%	五・二%	〇・六%	一・一%	二・四%	—	〇・一%	〇・三%	一〇〇・〇%	三三・三%	三三・三%	四四・九%	四五・七%	三九・三%	三五・九%	三四・二%
三三・三%	一〇・七%	三二・五%	二四・六%	五・三%	〇・五%	二・〇%	二・〇%	〇・一%	〇・四%	〇・五%	一〇〇・〇%	三三・三%	三三・三%	四四・九%	四五・七%	三九・三%	三五・九%	三四・二%
四四・九%	一一・五%	一五・三%	一五・一%	四・八%	三・九%	一・六%	〇・七%	〇・一%	〇・九%	一・三%	一〇〇・〇%	三三・三%	三三・三%	四四・九%	四五・七%	三九・三%	三五・九%	三四・二%
四四・九%	一〇・一%	一〇・八%	一三・一%	四・一%	五・三%	一・四%	〇・四%	—	三・八%	五・四%	一〇〇・〇%	三三・三%	三三・三%	四四・九%	四五・七%	三九・三%	三五・九%	三四・二%
三九・三%	一〇・八%	九・三%	一四・二%	三・八%	九・一%	一・三%	〇・四%	—	三・九%	七・八%	一〇〇・〇%	三三・三%	三三・三%	四四・九%	四五・七%	三九・三%	三五・九%	三四・二%
三五・九%	九・五%	六・三%	一五・〇%	三・七%	一〇・〇%	二・〇%	〇・四%	—	六・九%	一〇・三%	一〇〇・〇%	三三・三%	三三・三%	四四・九%	四五・七%	三九・三%	三五・九%	三四・二%
三四・二%	八・三%	五・三%	一五・三%	三・六%	一二・五%	一・九%	〇・三%	—	八・三%	一〇・四%	一〇〇・〇%	三三・三%	三三・三%	四四・九%	四五・七%	三九・三%	三五・九%	三四・二%

既に畑作、米作の兩中心が何れも道南地域より大約東北方に移動せりとせば耕地面積分布の方向も亦之に伴ひたるべきは明瞭であり、前表各國別百分率を詳細吟味すれば更に分明に之を看取し得る。

今例により、本道農耕地分布の地域的相對的變遷につき之を圖示し、各國別に要約すれば、
 渡島 國——當初急激に其の相對的分布率を減じ、明治中葉以後は漸減的步調をたどれり。

後志國、日高國——大体微量乍ら漸減的傾向を示せり。

膽振國——増減不同其の間著しき變化を見ず。

石狩國——當初急激に増加し、明治中葉以後漸減的傾向を示せり。

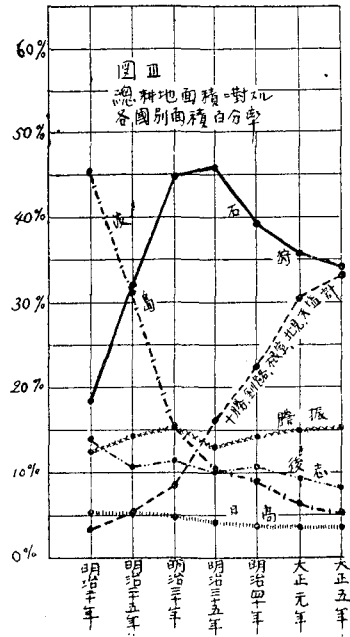
十勝、釧路、根室、北見、天鹽五ヶ國合計——累年極めて顯著なる増加を示せり。

之れを前掲本道畑地國別百分率圖並びに之れ

が國別要約と對照せば、既往本道耕地面積の各國別相對的分布の變遷傾向は、畑地の其と殆んど全く相一致し居るを見る。之れ本道耕地中、畑地其の大部分を占め、田面積の割合甚だ小なるが故に外ならない。即ち本道田地の畑地に對する割合は既往に於て一進一退ありたるも明治初年より大正五年に至るまで田は畑の一割に達せる事

(註) 北海道に於ける田の畑に對する割合累年表

明治10年	0.862
明治15年	0.868
明治20年	0.709
明治25年	0.477
明治30年	0.411
明治35年	0.695
明治40年	0.611
大正元年	0.921
大正5年	0.977
大正9年	1.110
大正14年	2.091
昭和3年	2.756



がなかつた。(註参照)

従つて吾人が先に既往本道畑作中心の移動に關して論ぜざる處は其の儘之を本道既往農耕地中心の動きに適用するも大過なき譯であり、此處に本道農耕地中心も亦東北進せるの事實を認め得る。

然らば近年に於ける位置移動狀況は如何。近年本道は田地に於いて著しき増加を見、其の畑地に對する割合の多きを加へつゝある事は既に先に一言せる處であり。昭和三年に於て田地は畑地の三

割に垂んとして居る事前註に見るが如くである。故に事情は既往に於ける其と稍々趣を異にする。私は次に之を本道農作（田畑作付面積合計）中心の調査に依つて見る。

近年に於ける本道本島の農作（田畑合計）中心（略圖（六頁）参照）

	北緯	東經	位 置	前期より移動
大正九年 ⁽¹⁾	四三、一八、〇五	一四二、一〇、三〇	下富良野驛の西イ 南五里弱	
大正十四年	四三、一九、一〇	一四二、一三、一二	下富良野驛の西イ 南約三里半	東北東約一里十町
昭和三年	四三、一九、一二	一四二、一九、一二	下富良野驛の西イ 南約一里半	東微北約二里余

即ち農作（田畑合計）中心は近年の傾向に於ては大体北緯四十三度十八分線と東經百四十二度十分線との交點より前者に對して北に約十五度の角度をなす直線に沿ふて、東北東微東に一ヶ年平均約十五町宛進行しつゝある。之を前述米作、畑作の兩中心の位置と對照するに、農作（田畑合計）中心の位置は右兩中心を結ぶ直線上にて畑作中心の位置に近き地點にあれども、之れが年を逐ふて次第に米作中心に近づき畑作中心に遠ざからんとする傾向を示し居るは、米作面積の割合年々増加するの事實に鑑みて理の當然である。

二、北米合衆國に於ける農業中心の位置及び其の移動

以上私は稍々詳細に北海道に於ける農作中心の既往の移動の方向をたづね、其の近年に於ける所在點に就き調査せる處を述べた。次に私は北米合衆國に於て調査せられたる結果につき述べ、上述本道調査の成績と對照して見よう。

北米合衆國に於ては一七九〇年第一回の國勢調査の折以來各十ヶ年毎に人口中心並に正中點に就き調査し來つて居るのであるが尙一八五〇年以來各十ヶ年目毎に農場數中心、農地面積中心、農場資産價額中心、玉蜀黍・小

(1) 大正九年米作付面積と大正十年の畑作付面積との合計面積より算出せる位置なり

麥・燕麥の各生産の中心等農業上の諸種の中心を調査して居る。(一九〇〇年に於ては尙之に加ふるに土地改良面積中心、棉生産中心、六種穀物生産中心、農場粗收入中心等の諸中心も調査せられた。)右農業上の諸中心の中、農地面積中心の調査成績を表示すれば次の如くである。

調査年度	北緯		西經		主要都市よりの近似位置
	度	分	度	分	
一八五〇	三七	二六	二〇	秒	ケンタツキー州ブリスウィット郡内にありオハイオ州シンシナチの東南徽南百二十五哩
一八六〇	三七	四一	〇一	秒	ケンタツキー州ハーティン郡内にありルイスヰルの南徽西四十哩
一八七〇	三八	〇五	一九	秒	インディアナ州ベリー郡内にありエバンスビルの東徽北五十哩
一八八〇	三八	〇八	二八	秒	イリノイ州ホワイト郡内にありミツスウリー州セイントルイスの東南東百二十五哩
一八九〇	三八	五八	二二	秒	ルイスの北徽東二十五哩
一九〇〇	三八	一一	三六	秒	ミツスウリー州カムデン郡内にありジェフアーツン市の西南四十八哩
移動總計	〇	四五	一六	〇	
一ヶ年平均移動	〇	〇〇	五四	三	
	〇	一一	〇四	七	

即ち之れに依つて見るに北米合衆國に於ける一八五〇年より一九〇〇年に至る五十年間の農地中心の移動狀況は大體に於て東徽北に向つて進み來れるを知る。而して其の移動一ヶ年平均速度は北に約五四秒、西に約十一分四秒にして之を本道に於ける農作中心の最近の移動に比する時は其の速度甚だしく大である。

尙此の外北米合衆國に於ける燕麥・玉蜀黍・小麥等重要作物の生産中心の調査結果に見るも其の所在點は或るものは比較的北部に位置し(燕麥及小麥)、或るものは比較的南部を走り(玉蜀黍)、又或るものは他に先んじて大陸内地に進入し(小麥)、或るものは稍々之れに遅れて進む(玉蜀黍)等相互に異つて居るが、其の移動方向に至つては何れも大體相似であり農地中心と稍々同様に西徽北に進んでゐるのは特に注目すべき現象である。即ちこ

(1) "Twelfth Census of the U. S." 1900 Vol V Agriculture, Part I. XL

れは北米合衆國の農業が西徵北方に向つて移り來つた事實を表示するものに外ならず、之を本道に於ける東北方移動と對照する時は東西其の方向相反する譯である。

ホ、農作正中點

茲に正中點と言ふは英語に於けるメヂアンポイントにして高岡博士の用語である。即ち農作正中點とは調査地域内に於ける農業作付地を東西及び南北にそれ〴〵二等分する二線の交點を指すものである。故に農作正中點は前述農作中心と其の性質を異にし、農業作付地の地域的分布比率のあらゆる變化により直ちに影響せらるゝものではなく、唯其の東西或は南北の二等分線により分たれたるそれぞれ相對する兩地域内に於ける農業作付地の面積に不同の生じたる場合に於てのみ、之をそれ〴〵等分に分つ點にまで移動するものである。又之を別言すれば農作中心に於ては同じ作付面積の増減と雖も其の増減の地點即ち中心よりの方位と距離に依り何れも中心を移動せしむる力に不同があるけれども、農作正中點に於ては、縦横の兩二等分線により分たるゝ四箇地域中各其の同じ地域内に於ける面積増減なる限り、其の地點の如何にかゝわらず正中點に影響する處は獨り其の増減面積の大小に關係するのみである、従つて農作正中點の位置及其の移動狀態は必ずしも農作中心の其と一致するものに非ず、而かも正中點も亦叙上の性質により農作中心とは全然異なる意味からよく農業作付面積の分布狀態及其の變化を大觀せしめるの資となる。吾人は此の兩者を合せ調査し、之を比較吟味する事により農業作付面積の分布狀態及び其の移動に關する概念を最も正確に把握する事が出来るのである。

次に北海道に於ける最近三期の調査結果を掲げる。

北海道本島に於ける農作正中點 (略圖(六頁)參照)

一、畑作正中點

調査年度 北 緯 東 經 近似位置 前期より移動

北海道に於ける農作中心の移動に關する研究

北海道に於ける農作中心の移動に關する研究

大正十年	四三、〇八、二〇	度	分	秒	一四二、〇八、三〇	度	分	秒	〔空知郡金山驛ノ西方約五里二十丁〕
大正十四年	四三、〇七、三〇	度	分	秒	一四二、一八、一八	度	分	秒	〔空知郡金山驛ノ西方約二里十二丁〕
昭和三年	四三、〇八、〇〇	度	分	秒	一四二、二五、二〇	度	分	秒	〔空知郡金山驛ニ位ス〕
移動總計	(-) 〇、〇、二〇	度	分	秒	〇、一六、五〇	度	分	秒	丁 東イイ南方約三里二十
一ヶ年平均移動	(-) 〇、〇、〇三	度	分	秒	〇、〇二、二四	度	分	秒	丁 東イイ北方約二里十二

二、米作正中點

調査年度	北緯	東經	近似位置	前期より移動					
大正九年	四三、三一、二〇	度	分	秒	一四一、五八、〇五	度	分	秒	〔瀧川驛ノ南東微東約一里二十丁〕
大正十四年	四三、三一、三〇	度	分	秒	一四二、〇三、一一	度	分	秒	〔歌志内驛ノ東北イイ東約七丁〕
昭和三年	四三、三二、四五	度	分	秒	一四二、〇五、二二	度	分	秒	〔歌志内驛ノ東北イイ東約一里六丁〕
移動總計	〇、〇、二五	度	分	秒	〇、〇七、一七	度	分	秒	丁 東イイ北約一里二十六
一ヶ年平均移動	〇、〇、〇三	度	分	秒	〇、〇、五五	度	分	秒	丁 東北イイ東約三十四丁

即ち之れに依れば本道本島に於ける畑作付面積の正中點は、最近（昭和三年）北緯四十三度八分、東經百四十二度二十五分二十秒の個所にして宛かも空知郡金山驛附近にあり、之を大正十年以降七ヶ年の推移に見るに、畑作正中點は北緯四十三度八分線に沿ひて東方に向ひ、一ヶ年平均二十八町乃至三十二町宛進み來つて居る。而して昭和三年の米作正中點は歌志内驛の東北微々東約一里六町の地點で、即ち北緯四十三度三十二分四十五秒、東經百四十二度五分二十二秒に位する。而して其の大正九年以降の移動を前掲の調査により見れば、北緯四十三度三十一分線と東經百四十一度五十七分線との交點より北緯線に對し北に約十五度の角度を持つ方向を取りて一ヶ年約十一、二町宛進行し來つた事を表示して居る。

尙畑作並に米作の兩正中點を比較するに其の最近數ヶ年に於ける調査結果に於て畑作が東進するに對して米作が東よりの東北方に向つて進める事宛かも畑作中心及び米作中心に於ける其と同様である。而して右兩正中點の東西及び南北の關係的位置も兩中心間の其と稍々相似であつて、東經度に於ては一般畑作正中點の方が米作正中點よりも稍々高く、北緯度に於ては米作正中點の方が一般畑作正中點よりも高い。これ本道農業作付地分布の近年に於ける變化の趨勢が、米作は比較的東北方部に、畑作は比較的東方部に其の比率を増大しつゝあるの事實を表示するものに外ならず、更に本道作付地は、畑作に於ては米作に於けるよりも稍々東南部に厚く、従つて米作に於ては畑作に於けるよりも西北方に偏することを最も明確に表はすものである。之を各中心と之に對應するそれ〴〵正中點との相互關係に就て言へば、畑作に於ては正中點は中心の南方にあり、米作に於ては、之に反して正中點は中心の北方にある。故に兩正中點の位置の南北の開きは、兩中心の其れよりも遙かに大である。これ畑作付地は絶對面積に於て其の中心よりも南方に多く存在し、米作付地は却つて、其の中心より北方に多く存在する事を示すものである。而かも各其の中心が一は正中點より北方に一は却つて南方に位置する所以のものは、中心より南方及び北方に存在する各作付地に就て、畑作に於ては南方に存在する作付地の方が北方に存在するものよりも比較的中心に近く、同様に米作に於ては其の中心より南方に存在する作付地の方が北方に存在する其よりも比較的遠距離の地點に偏在する事を意味するものである。

次に中心及正中點の一ヶ年平均移動距離を相互比較するに、畑作に於ては其の正中點の移動（一ヶ年平均約三十一丁弱）は中心の移動（一ヶ年平均約二十丁強）よりも稍々大であり、米作に於ては此に反して、其の正中點の移動（一ヶ年平均十二丁）は中心の移動（一ヶ年平均二十四丁）より遙かに小である。これ畑作に於ては其の作付面積比率の主として増大せる地域（河西支廳）が之を總体的に見て比較的中心に近き地點にありしに反して、米作に於ては其の作付面積比率の主なる増加場所が比較的中心を離るゝ事大なる地域（網走、留萌兩支廳等）に

ありしを表はすものである。

次に參考の爲めに北米合衆國に於ける農業正中點に就き調査せられたる結果を一瞥しよう。

北米合衆國に於いては正中點に關しても、其の中心に關してと同様農業上種々の觀點に就て之れが調査を行つて居る。其等諸調査の中農耕地面積に關する正中點の調査成績を轉載する。

北米合衆國に於ける農耕地面積の正中點⁽¹⁾

調査年度	北緯		西經	
	度	分	度	分
一八五〇	三七	三四	一一	八三
一八六〇	三七	三六	二二	八四
一八七〇	三八	三二	四八	八五
一八八〇	三八	四一	五九	八七
一八九〇	三八	五一	四八	八九
一九〇〇	三八	二八	一九	九二
移動統計	〇	五三	五八	二九
一ヶ年平均移動	〇	〇	一	四九

主要都市よりの近似位置

- ケンタツキ州アリソイト郡内にありルイスヰイルの東南東百五十哩
- ケンタツキ州ホイル郡内にありルイスヰイルの東南六十八哩
- ケンタツキ州ヘンリー郡内にありルイスヰイルの東北三十六哩
- インデアアナ州ダウイス郡内にありエバンスヰイルの北北東五十四哩
- イリノイ州フエイエット郡内にありスプリングファイールドの東南東南六十七哩
- ミツスワリー州モルガン郡内にありジェフアーソン市の西西南四十五哩

即ち北米合衆國の農耕地の正中點は過去五十年間に於て、大体東微北に向つて進み來つて居る。而して之れを前掲農耕地中心と比較すれば明らかなるが如く、斯國の農耕地中心と其の正中點とは、其の進行に於て時に稍々相違あれども大体は兩者相伴ひ移動の方向についても距離についても其の間甚だしき徑庭あるを見ない。之を北海道に於ける正中點の調査と對照すれば、既に中心の調査に就き比較對照せる際一言せると同様、其の移動の方向の全く相異ると、移動速度に於て北米合衆國の方が甚だしく大なる二點に注意すべきである。

(1) "Twelfth Census of the U. S." 1900 Vol V, Agriculture, Part I. XL

四、北海道に於ける農作中心移動の社會經濟的關係

本道農作中心及正中點の移動狀況は取りも直さず本道農業資源開發の地域的發展經過を如實に示すものに外ならず、農業を以て基礎とせる本道拓殖事業進展の跡を最も明からに表現するものである。而して之れが素因としてはもとより本道の本州に對する地理上の位置及び本道各地域の地勢氣候等自然的狀況に依つて影響せられしもの大なるべく、更に社會經濟上に於ける各般の現象が之に與つて關係あるべきは勿論であるが、畢竟之に根幹的關係を有するものは土地と人とである。即ち之を換言すれば、本道土地處分政策の經過と之に伴ふ移民招徠、人口増殖の現象である。

1、本道農作中心の移動と本道土地政策との關係

本道は開拓使の設置以來、土地私有制を以て其の富源を開發せんとし、夙に國有未開地の處分を以て本道拓殖の中樞政策とし種々經綸の行なはれしを見た。明治十九年北海道廳の統治に屬するに及ぶや直ちに同年より明治二十二年に至るの間に全道の大原野に就て豫め地質の良否、地勢の適、不適等を調査して殖民地の選定をなし、其後も各地の小原野に就て之れが選定をなす處があつた。一方明治二十二年大和國十津川郷罹災民の移住に當り移住地を區劃せるを初めとし、爾來選定濟の殖民地を年々區劃して、土地の整理を爲すと共に之れが處分に便ならしめた。斯くて明治十九年六月閣令北海道土地拂下規則、明治三十年法律第二十六號北海道國有未開地處分法並に明治四十一年法律第五十七號による同法改正等により、之を貸付け又は賣拂ひ成功後又は豫定期間内に起業着手したる者に附與するの法を講じ、移民に對しては直接或は間接に諸種の保護施設をなして之を助長したのである。斯くして本道の土地開發と移民招徠の實は進展したのであつて、本道農業は之に伴ひ土地と人とを得て發達の一途をたどつたのである。而して殖民地選定區劃事業實施前に於ける賣下、下與、貸下、拂下の土地は言ふも

(1) 明治五年十月 太政官布告第304號 北海道土地賣貸規則

(2) 明治十九年六月 閣令第16號 北海道土地拂下規則

更なり、本事業による面積及び畫數も、從つて其後の貸下、拂下、貸付、附與等の土地に於ても、大体當初は交通、地質、土勢等の關係に於て比較的便宜の地點に多かりしは當然にして之れが道路、鐵道、港灣、治水等の土木事業及び教育衛生等の社會的施設其他の補助政策の實施により、漸次奥地に向つて進入したのである。

從つて本道の農耕地或は農業作付地も亦處分土地面積の進行と人口の現象の推移とに密接なる聯關を持ち、土地私有制度の下に、開墾並に農業上に於ける諸種の試驗、指導、獎勵施設と相俟つて次第に其の面積を加へ、其の分布を漸次奥地に向つて擴けたるべきは蓋し自然の數である。

今明治二十二年、明治二十五年より大正五年に至る各五ヶ年毎、及び大正八年までの各殖民地區劃の累計畫數並に大正八年までの區劃殖民地の累計面積を各國別に示せば次の如くである。

北海道殖民地區劃(畫數)

國別	明治二十二年	明治二十五年迄	明治三十年迄	明治三十五年迄	明治四十年迄	大正元年迄	大正五年迄	大正八年迄	大正八年迄(百分率)
石狩	三六、〇〇〇	七〇、〇〇〇	一八、三三三	一九、九二一	三三、三三三	四四、七六六	四四、八〇八	四四、九六二	一五・〇
後志	—	—	三二	一、八六六	三、一四八	五、二二三	五、五二五	五、五三〇	三・三
渡島	—	—	—	九四	三九八	一、〇六四	一、二二八	一、三三八	〇・七
膽振	—	—	二、八九八	六、六〇〇	八、五二三	一五、〇四五	一五、四八九	一五、八三三	九・五
日高	—	—	—	—	七〇	一、〇一三	一、二三八	一、三六四	〇・八
十勝	—	—	四、八九三	一八、九九八	三三、六五三	三六、五九	三九、三三四	三三、一三三	一九・三
釧路	—	—	七、八〇元	九、七三五	一〇、一七八	一二、九七三	一四、四三三	一四、九八一	九・〇
根室	—	—	—	三、三八	三、三八	三、八八二	三、八八二	四、四四二	二・七
北見	—	—	三、五三三	三、九六	三、九六	三、八八三	四〇、八六六	四三、七三四	二五・六
天鹽	—	—	三、八〇〇	一五、九七九	一八、九八〇	三三、六四三	三三、一五〇	三三、五七〇	一四・〇

(3) 明治三十年二月 法律第26號 北海道國有未開地處分法

合計 三六、一三、〇九 五、四、四一 一〇、六、三三 二六、九、四四 一五、八、九九 一五、七、七 一六、六、六六 100.0

北海道殖民地區劃(面積) (大正八年迄合計)

國別	實數	比例數
石狩	一三二、六三〇・八七二四	一三・二%
後志	三〇、五九六・〇一〇〇	三・〇
渡島	五、六二一・三一二五	〇・六
膽振	八五、二五六・三四二〇	八・五
日高	六、六四七・〇六二九	〇・七
十勝	二七五、二八六・五八二八	二七・三
釧路	八〇、八二六・七九一七	八・〇
根室	五〇、九八一・四八〇〇	五・一
北見	二二四、七二〇・三九一九	二一・三
天鹽	一二五、六五四・八六一三	一二・五
合計	一、〇〇八、二二一・七五〇〇	一〇〇・〇

即ち右の表に依つて明らかなるが如く、本道殖民地區劃事業は、初め石狩國內に於て多く行なはれ、之れが明治中葉を過ぐる頃より次第に十勝、北見、天鹽、釧路等の東部或は北部諸國に多く行なはるゝに至つて居るのであつて、大正八年末までの累計畫數は本道の東北端に位置する北見國が既に首位を占め四万二千七百畫を越え、全道總畫數の約二割六分であり、之に次ぐは十勝國の約三万二千百畫、其の總畫數に對する割合は約二割である。而して石狩國は第三位にあり、之に次ぐ天鹽國は稍石狩國に匹敵する畫數に昇つてゐる。而して本道東部及び北部に位置する北見、十勝、天鹽、並に釧路、根室の諸國の殖民地畫數を合計する時は十一万七千八百畫を越え、全道總畫數の約七割に當つて居り、更に之を其の面積に就て言へば總區劃面積百万八千餘町歩の中七十四万七千

餘町歩であり、總區劃面積の實に七割四分以上を占めて居る。之に依つて、本道の殖民地選定並に其の區劃が如何に東部及北部諸地域に多く擴げられたるかを知る事が出来るのである。而して本道南部及び西部地域を占むる渡島及び後志二國に於て、前後を通じて殖民地の選定區劃せられたる事の少きは此等二國が何れも本道十一ヶ國中、根室國に次での小國であり、而かも山嶽重疊して肥沃の平野に乏しきに加へて、此等兩國は本道十一ヶ國中最も早く開發せられたる地域に屬し、爲めに可墾可耕未開地面積の既に比較的少なりしに基因する。

斯くの如くにして、本道の未開地は此等區劃地に就て、即ち主として、中央部に初まり東部及北部の地域に及んで貸下、拂下、貸附、附與、或は賣却等の諸種の處分を探られ、人口は之を追つて次第に其の地域的分布を擴大し、其の中心を東北方に向つて移動せしめたるものであり、同時に本道の農業の地域的に東北方に移動發展せるの主要因も亦此にある事は必定である。

未開地處分の進行に就ては既に高岡博士が人口中心移動の主要なる原因の一として之を逐次説明せられて居る。私は次に人口分布の推移と農業の地域的發展との密接なる關係に就き論述しよう。即ち之れに依り未開地處分の進行と農業との關係も亦自ら明らかとなるであらう。

□、本道既往農作中心の移動と人口中心の移動との關係

もと本道の拓殖は農業的開發を以て主眼とせられ、農業の發達を根幹として進捗した。従つて本道の人口増殖推移中、農業人口の推移は最も重要な要素をなくして居る。今之を累年本道來住者の職業別につき見るに、⁽¹⁾來住農業者の總來住者に對する割合は明治初年に於ては比較的小であるが之れが次第に増大し、たちまち他業移住者に冠絶するに至り、明治三十年以降大正二年に至る期間はその割合最も大であつて、明治三十年より同三十三年に至る間、同三十八年より大正二年に至る間各年の如き來住者中農業者が過半数を占めて居る。其の後農業者の來住割合は少々減少したが尙總來住者の半数に近き割合を保ち遙かに他業者を凌駕して居る状態である。斯く

(1) 北海道史 附錄 年表 78・80頁

て本道現任人口中、農業人口の割合は、之を次表に見るが如く、明治十九年に至るも未だ僅かに二割に満たざりしものが累年遞増して、大正元年には既に五割餘に達して居るのである。即ち明治初年以來、大正の初めに至る五十年間の本道人口増殖は主として農業人口の増殖に由來するものである。

本道農業人口の總人口に對する割合

年	農業人口		總人口		農業人口の總人口に對する割合	
	總人口に對する割合	總戸數に對する割合	總人口	農業人口	總人口に對する割合	總戸數に對する割合
明治十九年	六一・一五七	三〇八、八七一	一九・八%	二八・三	(農業戸數の總戸數に對する割合)	二八・三
明治二十四年	二六、一三五(戸數)	九二、四二二(戸數)	二八・三	(農業戸數の總戸數に對する割合)	二八・三	(農業戸數の總戸數に對する割合)
明治二十九年	五四、三二八(戸數)	一四九、一四〇(戸數)	三六・四	(同右)	三六・四	(同右)
明治三十一年	三二、七五九	八五三、二三九	三六・七		三六・七	
明治三十五年	四七二、九三七	一、〇四五、八三一	四五・二		四五・二	
明治四十年	六〇七、五四七	一、三九〇、〇七九	四三・七		四三・七	
大正元年	八八一、六四八	一、七三九、〇九九	五〇・七		五〇・七	
大正五年	九九一、一一七	一、九八四、五二八	四九・九		四九・九	

之れは畢竟本道人口現象の推移と本道農業發展との密接なる關係を示すものに外ならず、従つて本道の人口と農業との各其の地域的分布の推移に於ける携行を暗示するものである。

次に本道累年人口の地域的推移状態を表示しよう。

北海道人口、國別累年比較表

國別	實數									
	明治十六年	明治十九年	明治廿五年	明治三十年	明治卅五年	明治四十年	大正元年	大正五年	石狩	後志
國別	明治十六年	明治十九年	明治廿五年	明治三十年	明治卅五年	明治四十年	大正元年	大正五年	石狩	後志
石狩	三七、三九五	四五、六〇九	七二、一一三	一〇三、三三五	一三七、六四七	四六、一八八	五三、〇二五	六五、三三五	三七、三九五	五八、六四九
後志	五八、六四九	七二、三三三	一三三、三三四	一七三、八四五	二二〇、六三七	二六二、四六六	三〇、五二〇	三二、〇〇〇	二七、九八四	七二、三三三

北海道に於ける農作中心の移動に關する研究

北海道に於ける農作中心の移動に關する研究

合	天	北	千	根	釧	十	日	膽	渡
計	鹽	見	島	室	路	勝	高	振	島
二五三、九五三	六、一三五	二、九四四	一、三三八	五、四九五	五、一七三	三、三九七	九、六〇一	三、三〇六	三三、一九七
三〇八、八七一	八、〇三六	四、七三七	一、六一一	九、〇〇九	九、二一一	二、三三三	二、一七七	三、四四六	三三、九一一
五〇九、七九八	一五、一七三	一四、五五五	三、八二三	二〇、二九九	二四、八二三	二、九六〇	一五、三六八	三、五三三	二七六、八〇〇
七六六、三一一	三〇、〇九九	二七、四〇三	四、四二三	二八、一〇四	二九、七三三	〇、八五三	二、五五五	四、八四二	三〇九、三三三
一、〇四五、八三二	四四、九七八	六〇、六五三	四、五三三	二〇、九三三	二七、八四〇	三、七三五	三、五三六	一〇、一〇七	三三三、一七七
一、三九〇、〇七九	九三、一〇四	七五、八〇七	五、〇三九	三三、二四五	四〇、二六七	五、五〇八	三、一三〇	一〇、一〇六	三四、七一九
一、七五九、〇九九	二五、六八五	二七、六九一	六、〇三六	三三、三三七	三九、一八八	七、四七三	三、九四三	一八、九八三	三四三、九八三
一、九八四、五八	二四九、八〇四	一七四、九九九	六、七三三	二六、九九八	三六、九九八	九三、三〇七	四三、一九三	二〇、五五七	三六七、三〇〇

比 例 數

合	天	北	千	根	釧	十	日	膽	渡
計	鹽	見	島	室	路	勝	高	振	島
一〇〇.〇	二.四	一.一	〇.五	二.三	二.〇	〇.九	三.七	四.二	四六.七
一〇〇.〇	二.六	一.五	〇.五	二.九	三.〇	〇.八	三.八	四.一	四三.〇
一〇〇.〇	三.〇	二.九	〇.七	四.〇	二.九	〇.六	三.〇	五.〇	三三.七
一〇〇.〇	三.八	四.八	〇.六	三.六	二.五	一.四	二.七	六.二	二六.六
一〇〇.〇	四.三	五.八	〇.四	四.〇	二.七	二.九	二.四	六.七	三三.三
一〇〇.〇	六.六	五.五	〇.四	五.一	二.九	四.〇	二.二	八.六	二六.一
一〇〇.〇	七.八	六.三	〇.三	五.三	二.九	四.三	二.三	一〇.七	二四.〇
一〇〇.〇	七.五	八.八	〇.三	五.五	三.四	四.七	二.一	一〇.四	二二.五

明治十六年 明治十九年 明治廿五年 明治三十年 明治卅五年 明治四十年 大正元年 大正五年

前表により既往本道各別人口の相對的增減狀況を圖示し、之を地方別に要約するに

渡島國——累年極めて顯著なる減少を示せり。

後志國——大体に於て漸減的傾向を示せり。

日高國——微量乍ら漸減的步調をたどれり。

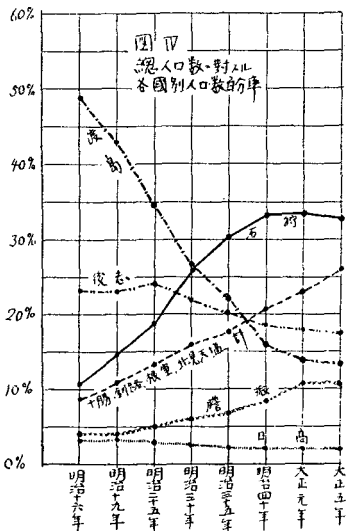
膽振國——大体に於て漸増的傾向を示せり。

石狩國——當初急激に増大し明治後期より稍々漸減的傾向を示せり。

十勝、釧路、根室、北見、天鹽五ヶ國合計——累年稍々著しき増大を示せり。

之を前掲本道耕地面積に於ける各國別相對的變遷と對照する時、各國の傾向は人口に於けると耕地面積に於けると相互殆んど相一致し居るを認める。之れ本道既往農業的地域的分布擴張が人口の其と大約相伴つて進みたる事を立證するものである。而して高岡博士に依れば、本道人口中心の移動は四十二度の北緯線と百四十度三十分の東經線との交叉點より四十二度の北緯線に對して五十度の角度をなす一直線に沿ふて東北の方向に進んで來て居る。然らば農作中心も亦本道西部地域より大体東北の方向に遷り來れる事明らかであつて、私が先に統計の吟味に依つて之を推知し得たるの事實は此處に更に明らかとなつたものである。

然れども、農耕地の地域的發展經過と人口の其とを各國別に仔細に比較する時は、其間、相互の傾向及び其の程度に於て尙多少の相違あるを認める。即ち渡島國は農耕地に於ても人口に於ても何れも累年極めて顯著なる相對的分布の減少を見るけれども、而かも農耕地の相對的減少の程度は人口の其よりも更に大なるを見る。又後志國



對的分布の減少を見るけれども、而かも農耕地の相對的減少の程度は人口の其よりも更に大なるを見る。又後志國

は前後を通じて、農耕地の分布割合は人口の其よりも小であり、膽振國に於ては、人口は相對的に漸増的傾向を示せるに對して、農耕地の相對的面積には此の傾向を認めない。即ち此等西部或は南部に位置する三國は何れも農耕地の相對的割合に對して人口の相對的割合の比較的大なるか、人口の増殖率の農耕地の増殖率よりも高き地方である。之れに對して十勝、釧路、根室、北見、天鹽の東北部五ヶ國の合計に於ては農耕地も人口も共に累年極めて顯著なる相對的分布の増加を示して居るが、其の程度に至つては農耕地に於て特に著しきを見る。即ち此等五ヶ國は農耕地の相對的發展の程度は人口の相對的増殖の程度よりも遙かに大なりし地方である。而して此の間本道中央部を占むる石狩國は、相對的に當初増大し、後年減少を示せる事、農耕地に就き見るも人口に就き見るも其の大約の傾向に於て變る處がないが、其の程度には稍々相違がある。即ち當初農耕地の相對的増大の程度は人口の相對的の増加程度を越え、後年、農耕地の相對的減少の程度は人口の相對的減少程度よりも著しい。之れ本道東部及び北部地方の農耕地の發展は人口の其に先行せるに對して、西部及び南部地方は之に反し、農耕地は比較的人口に遅くるゝを示すものである。又本道中央部の大半を占むる石狩國が、此處に於ても當初は本道東北部地域と同じ關係に立ち、後年は却つて西部及び南部地域と同じ關係に轉向せるは極めて興味ある事實である。畢竟、本道既往農耕地中心の東北進は人口の其よりも遙かに速やかにして、農耕地中心は人口中心に先行して強く東北方に牽引せられたるを認めしめるものに外ならない。

以上は既往に於ける本道農作中心推移に就ての人口中心との相互關係に關する吟味である。次に近年の農作中心の位置並びに其の移動に關する吟味に遷らう。

ハ、近年本道農作中心の移動と人口中心の移動との關係

大正十年の畑作中心及び大正九年の米作中心はそれ〴〵前述の如く、前者は空知郡下富良野驛の西南西四里餘の地點に、後者は空知郡美唄驛の東北東二十餘町の個所にあり、而して此の期に於ける農業作付面積(田畑合計)

による農作中心は下富良野驛の西微南約五里弱の所に位置する。之を高岡博士調査による大正九年の人口中心の位置と對照するに、畑作中心は人口中心を去る東北微東約六里半、米作中心は北微々西約四里半であり、而して農作(田畑合計)中心は東北微東約六里餘である。緯經度により之れが距りを示せば、

人口中心よりの距り (大正九年)

畑作中心	北	〇、七、一六分	東	〇、一六、四六分
米作中心	北	〇、九、三五	西	〇、一、一四
農作(田畑合計)中心	北	〇、七、二七	東	〇、一四、五六

右の如くであつて、即ち此の期に於て既に畑作も米作も共に其の中心は人口の其を越えて遙かに北方にあり、更に畑作中心は農作(田畑合計)中心と共に東方に著しく偏するを見る。之れ本道農業作付面積分布の状態は人口分布の其に比し、既に比較的北部地域に密にして、特に畑作に於ては著しく東北方に其分布面積比率の擴大せるを示すものに外ならない。

而して大正十四年に至るや前陳の如く畑作、米作の兩中心は一は東微々北方に、他は東北微東に、而して農作(田畑合計)中心は東北東に何れも進入せるに對して、一方本道人口中心は高岡博士に依れば明治初年以來常に例外なく大約東北進を重ね來れるも此の期に及んで全く從來の傾向に反し却つて南微西に約半里退いたのである。(2)かくて畑作、米作、從つて農作(田畑合計)の各中心との距りは前期よりも大となつた。之を緯經度に依り表せば、

人口中心よりの距り (大正十四年)

畑作中心	北	〇、八、三六分	東	〇、二〇、四五分
米作中心	北	〇、一四、〇	東	〇、七、四八
農作(田畑合計)中心	北	〇、九、三〇	東	〇、一七、四二

(1) 大正九年人口中心
北緯 43° 10' 38" 東經 141° 53' 34"
(高岡熊雄博士著 第二農政問題研究 189頁)

(2) 大正十四年人口中心
北緯 43° 09' 40" 東經 141° 55' 30"
(高岡熊雄博士著 前掲書 189頁)

右の如くにして、即ち此の期、畑作中心は人口中心を去る東北微東約八里餘、米作中心は東北約七里となり、農作（田畑合計）中心は同じく人口中心を去る東北微東約七里二十町となつた。更に昭和三年に於ては農作、人口兩種の中心間の距離は一層増大せられたるを見る。即ち昭和三年の人口中心は私の計算せる結果北緯四三度八分三六秒、東經一四一度五五分三三秒の地點にあり、空知郡美流渡驛の東南微南約半里の個所に當つて居り、前期より更に南方に半里餘後退したのである。然るに農作中心は前述の如く此の期に於ても依然、前期の地點より東方並びに東北東方に進入の傾向を緩める事がなかつた。斯くて今期に於ける農作中心と人口中心との所在地點相互の距りは、

人口中心よりの距り		（昭和三年）	
畑作中心	北	〇、九、四	度、分、秒
米作中心	北	〇、一六、五二	度、分、秒
農作（田畑合計）中心	北	〇、一〇、三六	度、分、秒
	東	〇、二、三七	度、分、秒

にして、即ち畑作中心は人口中心の東北東の方向に約十里三十町、米作中心は東北微北の方向に約九里、而して農作（田畑合計中心）は同じく人口中心の東北微東約十里の距りを示して居る。

斯様に大正九年の調査を基準とし、大正十四年昭和三年兩度の調査結果を見る時、人口中心は常に稍々南方に後退せるに對して、農作中心が依然東方乃至東北方に進み、人口中心と農作中心との所在地點相互の距離の益々大となれるの事實は吾人の最も注目すべき點である。即ち先に私が推知し得たる如く、本道農業の地域的進展は従來人口の地域的發展と互に相作ひ大約同じき方向を取りて進み來れるものであるが、近年の傾向に於ては其の殆んど相反する方向を取りたる事實を見る事これである。此の依つて來たる理の一として私の先づ指摘し得るは本道の拓殖事業が農業を先驅として進み常に奥地に向つて開墾せられ、農業作付地の分布を奥地に廣げつゝあ

り、而かも當初は殆んど農業的發展に専らであつたから、本道總人口と農業とは最も密接なる相互關係にあつたものであるが、近年相對的に商工業の發達著しく、大正時代に入りて以來、農業人口は相對的には勿論絕對數に於てさへ多少減少の傾向を示すに至り、爲めに次表の如く本道の總人口と農業人口との相互關係、從つて總人口と農業との相互關係が従前よりは多少稀薄になつた點である。

本道農業人口の總人口に對する割合（近年）

年次	農業人口	總人口	農業人口の總人口に對する割合
大正元年	八八一、六四八	一、七三九、〇九九	五〇・七%
大正五年	九九一、一一七	一、九八四、五二八	四九・九%
大正九年	一、〇三四、〇三二	二、三五九、一八三	四三・八%
大正十四年	九八六、一五六	二、四九八、六七九	三五・五%
昭和三年	一、〇二九、五五七	二、五〇六、八八三	四一・一%

次に私は更に詳細に農作、人口各中心の稍々反對方向に移動せる所以を各個に統計的に検討しよう。

近年農作中心が既往と同様に依然として東方乃至東北に進んだのは、積極的には本道東部及び北部地方に於ける田畑作付地分布面積の相對的增加にあり、消極的には西部及び南部地方に於ける作付地分布比率の減少に基因する事言ふまでもない。先づ之を畑作付面積の統計に見よう。

北海道近年の畑作付面積、支廳及び市別累年比較表

市廳及び市別	實數			比例數		
	大正十年	大正十四年	昭和三年	大正十年	大正十四年	昭和三年
石狩(札幌)	五五、六三・六 ^町	四九、八〇・八 ^町	四四、六七・三 ^町	七・八六%	八・六七%	七・六六%
空知	七三、五〇一・一	八二、六五・三	七三、四三・〇	一三・七六%	一四・四三%	一三・五三%

北海道に於ける農作中心の移動に關する研究

北海道に於ける農作中心の移動に關する研究

四〇

上川	九五、四三〇・〇	七三、九四三・九	六七、三三八・二	一三、四九	二一、六七	一一、五八
後志	七五、三六一・八	五二、五七〇	五〇、〇四二・五	一〇、六五	八九六	八・六〇
檜山	二六、五〇六・六	一九、五九八・八	一八、三〇五・一	三・七五	三、四〇	三・一五
波島(函館)	二五、六六五・五	二二、一三三・九	三〇、五七六・四	三・六三	三、六七	三・五四
膽振(室蘭)	三九、四三二・六	二六、一七三・三	二四、八八二・〇	五・五七	四、五五	四・三八
浦河	三三、九五二・〇	一五、二八二・四	一五、九三九・六	三・二四	三、六六	二・七四
河西	二四、六五二・六	一〇、六九八・八	二五、四九三・五	一六・一六	一八、一九	二・五七
釧路	一五、〇三三・九	一三、九四九・七	一五、〇九四・九	二・二二	三、三五	二・五九
根室	五、一七三・二	六、〇五八・六	一三、四八七・八	〇・七三	一、〇五	二・一五
網走	九三、三二〇・四	八三、一七〇・四	八四、八〇〇・〇	一三・一九	一四、二八	一四・五九
宗谷	一〇、八〇五・五	八、七四三・〇	七、五五三・六	一・五三	一、五三	一・三〇
留萌	二七、二八四・八	一八、九四九・七	一九、三五・六	三・八六	三、二九	三・三九
札幌市(區)	六〇九・二	五九八・〇	四三八・三	〇・〇九	〇・一〇	〇・〇八
旭川市(區)	五四九	四六一	四五六・九	〇・〇七	〇・〇八	〇・〇八
小樽市(區)	六三八・八	二七五・七	二九一・三	〇・〇九	〇・〇五	〇・〇五
函館市(區)	五四六・九	三三三・六	一六九・八	〇・〇八	〇・〇四	〇・〇三
室蘭市(區)	六三三・四	六一九・〇	六二五・四	〇・〇九	一・〇	〇・一一
釧路市(區)	三三七・五	三三三・三	三三六・九	〇・〇三	〇・〇四	〇・〇四
合 計	七七、六一三・九	五七、五三二・二	五八、一〇七・六	一〇〇・〇三	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇

前表の如く、本道畑作付面積は、大正十年度には戦後農業界に於ける好景氣の後を受けて、七十万七千六百町歩餘に達したが、これが反動的不況のため大正十四年には大減少を來し、五十七万五千三百町歩に満たない状態であつた。其後畑地開墾に關して、助成の途を講ずべき必要、當局の認むる處となり、昭和元年以來一方畑地の

開墾費に對し四割の補助を行ひ以て未墾地の開發を促進せしむると共に他方内國植民政策により、自作農創定の實を擧ぐべく、昭和二年度より五ヶ年据置二十五ヶ年賦の方法にて利率三分五厘を以て土地購入資金を貸與し、以つて之れが開發を圖りつゝあるに至つた。然れども本道畑總作付地は其の面積の其後擴大せらるゝ事未だ小にして、昭和三年に於ては大正十四年の面積に約六千町歩を加へたるに過ぎず、大正十年の作付面積に及ばざる事まだ遠い有様であつた。併し之れが地方別分布狀態の變遷に至つては可なり著しきものがある。即ち之を畑作付面積實數に於て見るに、其の面積極めて狭少なる六市を除外し、郡部十四支廳中に於て、常に其の絕對面積の擴張せられたるは獨り根室支廳あるのみであるが、浦河、河西、釧路、網走、留萌の各支廳は何れも、大正十年よりも同十四年に於て一旦其の絕對面積を減じ、昭和三年に至つて、再び増加を示して居る。此等の諸支廳に對して、石狩、空知、上川、後志、檜山、渡島、膽振並に宗谷の各支廳は何れも毎回其の絕對面積の減少を示して居る。今此等増減せる諸支廳の各位置を考へ合せるならば、本道畑作付地が其の分布比率を東部地域に廣けたるべき趨勢は既に大体知るを得るのであるが、更に之を地方別比例數につきて見る時は其の變化は一層明瞭であり、直接畑作付中心東進の理を看取し得る。即ち本道十四支廳中、常に畑作付地の分布率を擴大したるは河西、網走、根室、釧路の四支廳であり、何れも本道の東域を占むるものである。就中河西支廳の相對的面積分布の發展は最も著しく、大正十年より同十四年に於て二多餘を加へ、更に昭和三年には約三多餘を増したるは畑作中心の移動に對して積極的に大いなる影響を與へたるものである。之れ、河西支廳即ち十勝國が土地平坦にして地味肥沃であり、穀菽類、根菜類等の栽培に最も適し、特に甜菜糖業の發達と相伴ひ主要なる甜菜栽培地である事、而かも此の地方には未だ多大の未墾地を含むが爲めに、近時本道に於ける畑地の開發は此の地方に於て最も盛んである事、尙又此の地方の土質は比較的保水力に乏しきにより畑地が水田に變換せらるゝこと比較的少き事等の故である。而して釧路、根室、網走の三支廳の分布百分率の増加は河西支廳の其には遠く及ばないけれども、中心より

の距離の大なる關係上此等の中心牽引力も亦河西支廳に匹敵するものがある。此に對して、石狩、空知、上川、後志、檜山、膽振等本道中央部以西、並に以南大部分の諸支廳に於ける畑作付地比例數の減少が畑作中心の移動に消極的影響を及ぼしたるは勿論であり、更に宗谷、留萌の二支廳即ち本道北部地域に於て、畑作付地比例數の増加を見ざりしのみか、却つて稍々減少せる事が本道畑作中心の東方移動をして之を北方に牽かざりし所以である。

次は米作中心の東北進の吟味に遷る。大正九年、同十四年及び昭和三年の米作付地面積並びに此が百分率を各地方別に示せば次の如くである。

北海道近年の米作付面積、支廳及び市別累年比較表

	實 數				比 例 數			
	大正九年	大正十四年	昭和三年	大正九年	大正十四年	昭和三年		
支廳及び市別								
石狩(札幌)	七、五三・七 ^町	一〇、五八・六 ^町	一三、九八・六 ^町	九・三四%	八・三三%	七・七八%		
空知	二七、六四・四	三七、二〇・七	四六、四七・五	三三・四四%	二八・九三%	二七・九五%		
上川	二九、四三・五	四四、三三・五	五三、八六・七	三三・七三%	三三・四四%	三二・七〇%		
後志	三、三五・一	五、六三・六	七、二四・八	三・九八%	四・四三%	四・三三%		
檜山	一、九二・三	二、九〇・四	三、七四・七	二・三五%	二・二六%	二・二六%		
渡島(函館)	四、〇四・六	四、七二・二	五、三三・一	四・九四%	三・六七%	三・一三%		
膽振(室蘭)	三、三六・五	四、五九・一	六、四七・七	三・九九%	三・五七%	三・八八%		
浦河	二、一六・五	四、四九・〇	四、九三・三	二・六五%	三・三三%	二・九六%		
河西	一、五九・三	七、〇三・一	九、九八・四	一・九四%	五・四四%	五・九五%		
釧路	五・七	九三・八	一三三・八	一〇・〇一%	〇・七〇%	〇・〇八%		
根室	—	五・〇	三〇	—	〇・〇〇%	〇・〇一%		

網走	四九八	四、五五・九	二二、七三・五	〇・〇六	三、四	七・六四
宗谷	〇・七	三三・七	四一九	〇・〇〇	〇・〇	〇・〇三
留萌	一〇五八	二、五〇・四	三、七三・七	一・三五	一・九六	二・三四
札幌市(區)	一九七	二四・四	一五・五	〇・〇	〇・〇	〇・〇一
旭川市(區)	二八九	二四・一	二四・一	〇・七	〇・七	〇・一三
函館市(區)	一〇七	九・三	一七・一	〇・〇	〇・〇	〇・〇〇
室蘭市(區)	一〇・〇	一三・八	三六・〇	〇・〇	〇・〇	〇・〇三
計	二、八四〇・九	二八、四五一・一	一六、七九・三	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇

即ち右の表に於けるが如く、本道の米作は之を全体として見るも、亦本道内何れの地方に見るも、何れも等しく發展の一途を進みつゝあるけれども(實數)、其の發展の程度即ち作付面積増加率に於ては地方的に著しき相違あるを認める(百分率)。即ち市部を除き本道郡部各地中河西、釧路、根室、網走、宗谷、留萌等東部及び北部各支廳の増加率は全道平均増加率を越え何れも其の分布比率を遞増したるに對して、増加率が平均増加率に及ばず、從つて之れが分布比率を遞減せるは、石狩、空知、上川、後志、檜山、渡島等本道西部、南部、若しくは中央部を占むる各支廳であり、米作中心の東北進せる理は此處に明瞭である。

米作中心の移動に與へたる影響の最も大なるべきは網走支廳である。即ち同支廳管内に於ける米作は極めて最近の發達に係り、大正七年には未だ僅かに六町步餘の作付面積を有せしに過ぎなかつたのであるが、其の後の發展は極めて著しく、大正九年には約五十町步となり、大正十四年には一躍して四千五百五十町步餘に昇り、更に昭和三年には實に一万二千七百四十三町步に達した。其の増加率の著しき遙かに他支廳に冠絶して居る。即ち大正九年に於ける全道米作付面積中該支廳の比例數は〇・〇六%なりしものが同十四年には三・五四%、昭和三年には七・六四%に及んだのである。由來網走支廳管内には網走川、常呂川、及び湧別川等の流に依つて潤はされて

居る廣大な沃野があり、水利の便に富み、土性も保水力に秀で、居るが、比較的氣候寒冷で雨量が亦寡なる事と、更に此の支廳は交通的に不便なる偏域の地に位置して居るが爲めに、其の開拓の歩みは殆んど近年に至るまで甚だ遅々たるもので、水田造成事業が進まなかつたのである。然るに明治四十四年九月池田より津別に通ずる鐵道が當支廳管内に入つて野付牛に通じて以來、大正元年十月、網走本線の完成、同五年湧別線の全線開通、同十年名寄線の延長、同十二年渚滑線、同十四年相生線開通する等鐵道の敷設事業が進捗した外、又其の間網走港の修築を見たのである。斯様にして此の地方の交通施設稍々備はりたるため當支廳は俄かに經濟的發達の途につき、米作の經濟的條件もこれが爲めに大いに改善せられた。而して一方農事試驗場支場其他に於ける幾多の育種實驗による稻品種の改良は實地の經驗と相俟つて此の地方の氣候風土に適する新品種の育成せらるゝあつて、米作の技術的條件も亦大いに好轉した。斯くて從來は石狩國內上川、空知兩支廳管内に於て最も顯著であつた本道造田事業が今や次第に其の力を北見地方特に網走支廳管内に延ばし來つたものである。要之、本道の米作の進展は近年は東北部地方特に網走支廳に於て著しき事が米作中心の東北進となつて現はれたものである。

次に然らば本道總人口の増殖の農業人口への依存性の稀薄と雖も其の爲めに人口中心の移動をして農作の其と反對の方向を取らしめる理は何處にあるか。此は近年人口の地方別の變遷を吟味する事によつて明らかとなる。

北海道近年の人口、支廳及び市別累年比較表

市廳及び市別	實 數		比 例	
	大正九年 (國勢調査)	大正十四年 (國勢調査)	大正九年	大正十四年
石狩(札幌)	113,644人	119,033人	4.8%	4.8%
空知	348,826	350,321	4.8%	4.7%
上川	336,337	344,977	10.1	9.6
現住人口				
			大正九年	大正十四年
			昭和三年	昭和三年

後志	一八六、四四六	一七三、三〇〇	一六五、八七八	七・九	六・八	六・六
檜山	六八、八四四	六八、八四五	六七、〇二六	二・九	二・八	二・七
波島(函館)	一四二、五五四	一六一、五五八	一五六、九四三	六・〇	六・五	六・三
膽振(室蘭)	九五、八四六	九七、三三三	九四、九三六	四・一	三・九	三・八
浦河	四八、七九九	五二、六七四	五三、一三六	二・一	二・一	二・一
河西	一四一、六三二	一四一、一八〇	一五四、六八四	六・〇	五・九	六・三
釧路	五八、五七一	六四、三四四	六四、八八八	二・五	二・六	二・六
根室	五二、三四四	五八、九八一	五四、五九五	二・二	二・三	二・三
網走	二〇二、一六四	二二二、六八九	二〇九、七七六	八・六	八・五	八・四
宗谷	七五、五五五	七七、七七八	六四、六四二	三・二	二・九	二・六
留萌	七三、二八七	七七、九七七	七七、五三〇	三・一	二・九	二・九
札幌市(區)	一〇三、五〇〇	一四三、〇六五	一五八、四九四	四・三	五・八	六・三
旭川市(區)	六二、三九九	七三、三四一	七〇、〇〇四	二・六	二・九	二・八
小樽市(區)	一〇八、二二三	一三四、四九九	一四五、一三五	四・六	五・四	五・八
函館市(區)	二四四、七四九	一六三、九七三	一七二、六二六	六・一	六・六	六・八
室蘭市(區)	五八、〇三二	五〇、〇四〇	五二、三九七	二・四	二・〇	二・〇
釧路市(區)	三九、五三二	四二、三三三	四三、四九五	一・七	一・七	一・七
合計	二、三九九、一八三	二、四九八、六七九	二、五〇六、八八三	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

本道西部及び南部地方には全道第一の人口集中地たる函館市を始め、本道の首都たる札幌市、並に商業都市の隨一たる小樽市、商工都市として屈指の室蘭市等の諸都市を包含し、商工業人口比較的多く従つて人口の密度比較的高きに對して、北部及び東部地方は旭川、釧路の二都市を含むけれども、其の商工人口の割合は西部及び南部に及ばず殆んど専ら農業に依存する地域にして、従つて農業作付地面積比較的大なるも人口の密度は比較的

低い。これ人口中心と農作中心とが互に其の所在點を異にする所以である。

而して前表の如く、本道の總人口は近年に於ても遞増しつゝあるは勿論であるが、其は主として都市に於ける増加に依るものであつて、郡部即ち農村に於ては概して其の増加率低きのみならず、却つて其の絶對數の減少を示して居るが如き状態である。即ち大正九年より大正十四年に至るの間、本道總人口は約十四万人の増加を見たけれども、其の中約十万人は、市人口の増加であり、更に大正十四年より昭和三年に至る僅か三ヶ年間に市人口には三万人の増加をホしてゐるに對して、郡部人口は却つて二万一千人に近き數を減じ結局總人口は此の間僅かに九千人餘を増加し得たるに過ぎなかつたのである。これにより本道人口の益々都市に其の密度高まり、郡部に益々其の密度薄くなりつゝある事實を明らかに看取し得るのであるが、更に、都市中に於ても近年最も著しき人口増加率を示し居る札幌、及び之に次ぐ小樽、函館の三市は何れも前述の如く本道の西部或は南部に位置するものであるに對して、比較的東部或は北部の地域に位する旭川、釧路の二市は一は人口分布比例數に一進一退を示し、一は其の比例數に變化を見ざりし市である。これ人口中心と農作中心とが互に益々相乖離せんとする傾向を見る所以である。

以上は農作、人口兩中心乖離の理を、都市と農村との聯關、從つて商工業と農業との關係の見地より立證したものであるが、更に吾人は之れが他の一因として、農村自体に於ける其の構成の地域的相違の點を豫想し得る。即ち本道農業作付地の單位面積當りの農業人口抱擁状態が比較的西部及び南部地域に於て密にして、東部及び北部地域に於て粗なるには非るかである。此の事實の有無を統計的に觀んとして、私は各地域別に作付地一反當收穫物價額及び、同じく作付地一反當農業人口を算出して吟味を試みたけれども、其の事實を認むる事能はず、又農業人口中には農業を副業とするものをも含み專業農業人口に關する統計の欠如し居る現状を以つてしては此の種事實の有無に關する統計的論斷は今此處には困難なるを知つた。

六、北海道に於ける農作中心移動の將來

以上私は北海道に於ける既往及び近年に於ける農作中心の位置及び移動狀況に關し、その事實の概要を論究した。次に然らば農作中心は將來如何なる方向に運行するであらうか。これは畢竟本道各地域の各種自然的狀況並にあらゆる向後の經濟的條件に依つて決定せらるゝものに外ならず机上に之れが豫想を立つる事は殆んど不可能である。然れども私が此處に一つの倚り處として採用し得るは、北海道廳の作成に係る本道農耕適地並に水田適地に關する地域別の調査である。尤も此の調査も、當局に於て尙多少の疑義を留保し居るものではあるが、假り之を以つて妥當なるものとせば、農業作付地は將來右の適地調査と一致するに至るべきものと解する事が出来る。即ち經濟的條件の變化によつて、農作中心移動の向後の過程には幾多の紆余曲節は到底免れ得まいけれども、其の窮極の推移は、本道を地域的に綜合的に觀察して比較的將來農耕的發展の余地を多く有する地域に向ふと見て差支へなからう。

次に私は農耕適地調査を要約加工して掲げ、向後の農業作付地開發の餘地を地域的に吟味する。

北海道農耕適地面積

支廳及び市別	農耕適地		畑適地(1)		水田適地(2)		昭和三年作付地分布 比例數との差(3)
	實數	比例數	實數	比例數	實數	比例數	
石狩	九二、八三一町	五・八六%	五五、三四八町	四・八八%	三七、四八三町	八・三三%	(-) 二・八八%
空知	一五五、〇三・八	九・七九%	七五、四五八・八	六・六六%	九七、五五五	一七・六八%	(-) 一・五・七一
上川	一八三、七四・九	一・六〇%	九七、四九一・九	八・六〇%	八六、二二三	一七・一七%	(-) 一・三〇・六

畑適地比例數の昭和三年畑作付地比例數との差
水田適地比例數の昭和三年米作付地比例數との差

(1) 此處に畑適地と稱するは農耕適地より水田適地を差引ける殘餘なり
 (2) 水田適地としては此の外に札幌、旭川、函館、室蘭各市に合計262町歩あり
 (3) 適地比例數の方が昭和三年作付地比例數より大なるは(+), 小なるは(-) 各市の作付面積は之を各其の所在支廳中に含めて算出せり

北海道に於ける農作中心の移動に關する研究

後志	一七三、五八・六	四・五八	五、〇五三・六	四・五〇	二、四五六	四・七七	(-)	四・一五	(+)	〇・四四
檜山	四、六〇〇・九	二・五七	三、三三・九	二・七六	九、三六八	二・八〇	(-)	〇・元元	(-)	〇・〇一九
渡島	五、五六一・二	三・五一	四、四〇一・二	三・八三	二、一六〇	二・七〇	(+)	〇・〇三六	(-)	〇・四三
膽振	七、〇三六・六	四・四四	五、三六・六	四・七九	二、六〇〇	三・七五	(+)	〇・四〇	(-)	〇・三三
浦河	五七、六四四・四	三・六四	四四、〇六五・四	三・八八	一三、五九	三・〇三	(+)	一・一四	(+)	〇・〇六
河西	三九四、八八・八	一八・六三	三〇〇、九七・八	一九、四九	七三、九五	一六、四四	(-)	二・〇八	(+)	二・〇四九
釧路國	一三九、七三三・三	八・八三	一三三、五二・三	一〇・八一	一七、三五	三・八三	(+)	八・八八	(+)	三・七五
根室	一三三、三九八・五	七・六六	一一一、六七三・五	九・八五	九、五九六	二・三三	(+)	七・七〇	(+)	三・二二
網走	一七、一四五・九	一〇・八一	一二、七五四・九	一〇・七四	四九、三九一	一〇・九八	(-)	三・八五	(+)	三・三四
宗谷	五三、七四一・五	三・三三	四三、三三五・五	三・七三	一〇、五〇六	二・三四	(+)	二・四三	(+)	二・三三
留萌	七五、四三三・五	四・七六	六三、二八・五	五・四八	一三、二九五	二・九六	(+)	二・一九	(+)	〇・七三
計	一、五八三、五五四・九	一〇〇・〇〇	一、二三三、六二九・九	一〇〇・〇〇	四四九、八六三	一〇〇・〇〇	〇〇・〇〇	〇〇・〇〇		〇〇・〇〇

右表に示した様に、本道農耕適地は北海道廳調査に依れば百五十八万三千五百五十五町歩であり、内、水田適地約四十五万町歩を算する。之を昭和三年の農業作付面積に比するに、同年の總作付面積は農耕適地面積の約半分に當り、内、米作付面積は、水田適地面積の僅かに三七%を占むるに過ぎない。本道農耕發展の餘地また甚だ大なりと言ふべきである。今農耕適地を田畑に二分し、地方別比例數に改算せるものにつき、之を昭和三年の作付地の地域的分布比例數と對照し、以て各地方の相對的發展の餘地の大小を尋ねるに次の如くである。

- 畑 相對的に發展の餘地大なる地方 1. 釧路、2. 根室、3. 宗谷。4. 留萌、5. 浦河、6. 膽振、7. 渡島各支廳
- 相對的に發展の餘地小なる地方 1. 空知、2. 後志、3. 網走、4. 上川、5. 石狩、6. 河西、7. 檜山各支廳
- 田 相對的に發展の餘地大なる地方 1. 河西、2. 釧路、3. 網走、4. 宗谷、5. 根室、6. 留萌、7. 石狩、8. 後志、

9. 浦河各支廳

相對的に發展の餘地小なる地方 1. 上川、2. 空知、3. 渡島、4. 膽振、5. 檜山各支廳

農耕適地調査にして妥當なる限りは、本道農作中心の向後の移動は窮極に於て、上記相對的發展の餘地大なる諸地方の積極的牽引と相對的に發展の餘地小なる地方の消極的影響に依り結果する筈であり、之を換言すれば農耕適地中心（畑適地中心及び水田適地中心）に向つて進み、之に一致するに至るべき筈である。

今各市町村農耕適地調査資料に依つて、農耕適地中心（畑適地中心、水田適地中心）を算出すれば次の結果となる。

北海道農耕適地中心 (略圖(六頁)參照)

	北緯		東經		位 置
	度	分秒	度	分秒	
農耕適地(田畑合計)中心	四二、三	〇	一四三、四	四〇	狩勝國境なる下ホロカメツトク山の南東南約十町
(1) 畑 適 地 中 心	四三、〇	〇	一四三、五	〇	十勝國、チカツベツ山の東微南約二十町
水 田 適 地 中 心	四三、三	〇	一四三、五	三〇	中富良野驛の南約半里

即ち農耕（田畑合計）適地中心は、本道地理的中心を去る東微北方約四里十五町、畑適地中心は同じく地理的中心の東微々北方約六里十町、而して水田適地中心は地理的中心の西北方三里餘の地點にある。而して之を最近昭和三年の各農作中心の位置と對照するに、農耕（田畑合計）適地中心は農作（田畑合計）中心を去る稍々東方（微かに北による）八里余であり、畑適地中心は畑作中心の東微々北九里餘、而して水田適地中心は米作中心の東微南六里餘の位置にある。即ち此處に經濟的條件の及ぼす影響を考慮外に置くならば、近年東北東微東方に向つて進み來れる農作（田畑合計）中心は農耕（田畑合計）適地中心に合致するが爲めには、今後北の牽引力を弱め其の近年の進路を南に約十度餘引きつけて進む事になり、而して畑作中心は、近年東方に向つて居つた進路を約十度北方に向け直して畑適地中心を望んで運行し、米作中心は近年の東北東微北に向ひ來つた方向を南方に約四

北海道に於ける農作中心の移動に關する研究

(1) 此處に畑適地中心と稱するは農耕適地より水田適地を差引ける殘餘地の中心なり

十度轉回して水田適地中心に向つて移動する事になる。而して更に農作各中心の將來の移動速度にして其が全く近年の速度と等しきものと假定すれば畑作中心は昭和三年より約十六年後即ち昭和十九年に於て畑適地中心に一致し、米作中心は約九年後即ち昭和十一年に水田適地中心に一致すべく、而して農作（田畑合計）中心は十九年後即ち昭和二十一年に至りて農耕（田畑合計）適地中心に合致する計算となる。

然れども右は上にも之を述べたるが如く、北海道廳の農耕適地調査を以て正確妥當なるものとし、道内各地域の經濟的諸條件の不同と其の變化を考慮外に置き、更に農作各中心の向後の移動速度を以て大正九年乃至昭和三年の一年平均移動速度と等しきものと見做せる等幾多の假定の上に立脚して算定せるものに過ぎない。もとより現實社會現象は複雑多岐なる諸種の條件に依つて影響を受け左右せられるものであるから、従つて農作中心向後移動も實際には必ずしも上述せる處とは一致しないであらう。私は唯右の假定的算定に依つて、農作中心の將來の移動の爲めに働く一つの勢力を見るに止まる。（完）

此の研究を爲すに當り、私は高岡・中島兩博士並に渡邊助教の御示教を受けた。私の厚く深謝する處である。それにも拘らず斯くの如き貧しき果を結ぶに過ぎなかつたのは私の不敏の故である。深く恥づる處である。